
ペルソナ4 ~ 迷いの先に光あれ ~

四季の夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペルソナ4〜迷いの先に光あれ〜

【Nコード】

N2842Z

【作者名】

四季の夢

【あらすじ】

影時間やタルタロス等の学園都市での闘いが終わったが一人の少年は眠りについてしまった。そして少年を守れ無かったと学園都市を去る一人の男。

それから二年、舞台は学園都市から一つの田舎町・稲羽市へと移る。そこで過去を背負い皆を守る為、瀬多洸夜の闘いが始まる

プロローグ

？「ん？ここは？」

俺は気が付いたら見知らぬ場所にいた。車の中・・・見たいだな。そして椅子の真ん中に要る見覚えのある男と見覚えのない金髪の美女いた。

イ「ヒツヒツヒツ私はイゴールです覚えておりますかな？」

？「ああ、覚えてるに決まって要るだろ。俺にワイルドの力やペルソナについて教えてくれたのは他にもない、あんただ。」

そうこの男ーイーイゴールは二年前に世話になったんだ。そこでふつと隣を見てみる。

？「あんたは？」

俺は隣の美女に聞いてみる

？「お初にお目にかかります私はマーガレットと言います。以後おみ知りおきを」

？「ああよろしく、ところでエリザベスはどうしたんだ前までは彼女がここに」

イ「エリザベスは現在ここを出ております。ちなみにエリザベスは私の妹でもありますよ」

その言葉に俺は驚く

「妹！？それに出てるって何処に？」

そして今まで沈黙を守っていたイゴールが口を開く。

イ「エリザベスは彼を助ける方法を探すために現実の世界を回っておるのです」

・・・その言葉に俺は目を開く。

？「・・・彼って言うのはやはり。」

俺の言葉に静かに頷くイゴール。

イ「ええ。貴方と同じワイルドの力を持ち二年前に皆を救つ為に眠りについて仕舞ったあの彼です」

「・・・そうか」

その言葉に俺はイゴールから目を背ける。そんな俺にマーガレットが声をかける

マ「そんな顔をしないで下さい、あの子も定期的に連絡を寄越しているので心配なさらずに」

その言葉に俺は

?「いや違うんだ」

マ「えっ?」

?「俺はあいつが、ああなっただって知ってどうすればいいかわかんなくてな、卒業式が終わったらすぐにあの街を逃げ出したんだ。」

俺の言葉を静かに聞いてくれるイゴールとマーガレット。

「その事からずっと逃げていた俺に比べて、エリザベスはあれからずっと頑張ってたんだな。」

俺の言葉にイゴールは

イ「あれは仕方ない事だったので。あれは彼が自分で決めた事、貴方が自分を責める必要はありません」

イゴールの言葉に俺はただ己の情けなさしかなかったそんな時だった。

マ「それで貴方どうするのですか？」

？「えっ？」

マーガレットの言葉について聞き返す俺。

マ「このまま、何もしないままでもいいんですか？」

その言葉に俺は怒りを感じてしまった。

？「うるせえ！お前に何が分かる！・・・俺は逃げたんだぞ。その過去は消えないんだ」

俺はそう言うと、顔を下げる。

マ「でも、未来は変えれますよ。」

その言葉に俺は顔を上げた

マ「たしかに過去は決して変わりません。ですが未来は変わります。ここまで言えば、分かるでしょ」そう言ってくれたマーガレットの顔は何処か優しかった。

？「・・・そうだな、俺にも何か出来るかも知れないな、だが何をしようか？」

イ「実は今回貴方をお呼びしたのはまさにその事なのです」

その言葉に俺は表情が真面目になる。「

？「何かあるのか？」

イ「ゴールはゆっくりと頷く

？「だが影時間もタルタロスも、もう無いんだぞ。」

イ「いえ、実は今度貴方様が行く町で事件が起きます」

「稲羽市で!？」

イ「ゴールは頷く

確かに俺は両親が海外で仕事をするから、弟が叔父さんの家に行くことになり、ついでにお前も来いと言う事になり近々弟と一緒に稲羽市に行く事になったのである。

？「そこで俺に事件を解決して欲しいと」

イ「はい、それと実は貴方様の弟様にもお願いするつもりです」

イゴールの言葉に俺は驚く

？「総司を！？なぜだ？」

イ「それは、運命だからとしか言えません」

「そんな理由・・・はあ

そうだったな、あんたはそう言う人だった」

そう言った俺の言葉にイゴールは笑いながら答える。

「ヒツヒツヒツ理解が早くて助かります。」

そうイゴールが言った瞬間俺は視界が揺れた。

「どうやら、現実の貴方が目を覚ますようですね」

「・・・そうかイゴール、マーガレットありがとう」

「いえいえ、私は何も」

そう言ってヒッヒッヒッと笑うイゴール

マ「ふふふ、ではまた会いましょう・・・瀬多^{せた}洗夜^{しんや}様」

そう笑うマーガレット

洗夜「ああ！またな！」

そうやって笑顔で返す俺

あれ？そういえば俺マーガレットに名前乗ったけ？そう思いながら、俺は視界が暗くなった。

マ「ふふふ、本当エリザベスの言った通り自分一人で全部背負い込もうとして、それで何処と無く放って置けない人だったわ・・・またね洗夜」

洗夜が消えた場所でそう言うマーガレットの顔は何処か楽しそうだった。

イゴールからの呼び出しから数日がたった。

現在俺は、弟と一緒に稲羽市に向かう電車の中だ。

洸（稲羽市で一体何があるんだ・・・イゴールが俺に頼んだと言う事はペルソナやシャドウ関連か？それともあいつに関係が・・・）
だが、幾らか考えても予測しか立てられない俺は結局ため息しかでなかつた。

洸「ハア・・・（こんな事ならあいつ等にも連絡すればよかったな、でも逃げ出した俺の事なんか相手にしてくれないか・・・だけど、あいつ等元気かな）」

とそんな事を思っていた時だった。

総「はっ！」

寝ていた俺の弟――瀬多総司が突然目を覚ました。

洸「おはよう、起きたか？」

総「・・・兄さん」

洸「なんかあったか？」

イゴールが干渉でもしたかな？あいつ夢の中で出て来るし。

総「いや、大丈夫なんでもない。」

洸「そうか、ならそろそろ降りる準備をしろ。間もなく着くぞ」

総「分かってるよ」

稲羽市が見えて来るのを確認して、そう言つと俺達は荷物をまとめ降りる準備をした。

洸「(さて、あの町で一体何が起こるんだろうな)」

キャラ紹介（前書き）

キャラ紹介です

キャラ紹介

瀬多 洸夜

《せた》 《こうや》

年齢：二十歳

外見：灰色の長髪、顔は上の下

使用武器：刀（片手剣）ペルソナ白書

ペルソナ：オシリス

能力：ワイルド・多重召喚（二体以上のペルソナ召喚）

趣味：剣術と料理

性格：家族と友達思いであるが一人で全て抱え混んでしまう。また優しさと厳しさを中立した性格で悪い時は自分だろうが他人だろうがキレル。

今作の主人公にしてペルソナ4の主人公の兄。

家から離れ一人で学園都市へ行き『私立月光館学園』の高等部に入学。

趣味でやっているだけあって、剣術はかなりの物。

それから、クラスが同じになった美鶴や明彦と友達になる。

そしてその夜の夢にイゴールが出て来て、色々と説明するがその時の洸夜は意味がわからず相手にしなかったが、次の日の夜に木刀で素振りの練習をしていた時に影時間に巻き込まれ、そして学園の場

所にあつたタルタロスに興味本位で侵入しシャドウと遭遇し異変に気付いた美鶴達と合流を果たしシャドウを撃退。(この時にペルソナ能力に覚醒)

そして美鶴達から事情を聞き、『特別課外活動部』に入部する。

武器の刀は美鶴から貰った物で世界に一つしかない、ある意味オールドメードな刀である。

それから3の主人公達が来た事により、皆のお兄さんの存在になり、ゆかり達からも信頼が厚かった。だが、自分の周りで敵味方なく、人が死に(千鳥は生存)目の前の命を守れ無かった自分を責めていた。

そして、自分達の卒業式が終わった後に3の主人公の状況を知り。

何も守れなかった自分に絶望し、3の主人公をどうすればいいかわからず、学園都市から逃げる様に去っていった。

その為、後日談は参加していない。

その後は家に帰りバイトや株又は近所の道場のお手伝いをしながら金を稼いでいた。

それから二年が経ち、イゴールとマーガレットの励ましにより自分にはまだ出来る事がある事を知り、巻き込まれる弟を守る事そしてまだ見ぬ事件解決の為に稲羽市へと向かう。

恋愛面

異性では美鶴との仲が一番良く。互いに意識していたが、互いに一

歩踏み出せず友達以上恋人未満の関係である。

主な使用ペルソナ

オシリス

物火氷風雷闇光

無――耐吸耐耐

洗夜が初めて出したペルソナで3の主人公とのコミュで姿が変わっている

姿は赤と白と黒の着物と甲冑を足して二で割った様な服に顔には龍の様な朱い仮面、背中には朱い翼そして右には大剣を持つ

風耐性

物理無効

ジオ系とムド系の技

そして数々物理技を持つ

攻撃型のペルソナ

ムラサキシキブ

物火氷風雷闇光

――耐吸耐耐吸吸

洗夜がイゴールの下で創ったペルソナ
姿は青の長髪に白と桃色の着物を着て、周りには金色の羽衣があり。
右手に本を持っている女性の姿をしたペルソナ

属性技

補助技

回復技

を多数持っているサポート型のペルソナ

この他にも多数のペルソナを使える。

霧の中の夢（前書き）

なんとか投稿です

霧の中の夢

洸「ふう座り過ぎて、尻がいたいな」

電車から降りて、俺が最初に言った言葉。座るのは楽だが、座り過ぎはだめだな

総「これから、どうすんだっけ？」

駅から出て辺りを見回す

総司

洸「叔父さんが迎えに来てくれる筈なんだが・・・」

俺も一緒に見回した時だった。

堂「おい、こっちだ！」

少し離れた所に叔父さん——堂島僚太郎とその娘さんの菜奈子が立っていた。

洸「いたいた！今行くよ」

叔父さんとは随分久しぶりだな。娘さんとは初対面だな。

堂「よ！二人とも写真よりハンサムだな。」

洸「ありがとよ叔父さん、そしてご無沙汰してます」

堂「本当に久しぶりだな。全く少し見ない間にでかくなりやがって」

洸「ならなかつたら問題でしょ。」

堂「はは！そりゃそうだ」

なんて世間話をしている。俺と叔父さん。そして挨拶する総司

総「初めまして」

そう言っ手を出す総司

「初めましてか・・・オムツを取り替えてやった事も有るんだかな」

そう言っ笑いながら握手に応じる堂島

堂「都会と違って退屈かもしれんが・・・」

洸「大丈夫だよ、それよりそろそろ自己紹介したいんだけど」

堂「ああそうだったな、ほら菜奈子」

そう言っつて堂島の後ろから顔を出す菜奈子ちゃん

総「初めまして、瀬多総司です」

総司に続いて挨拶する俺

洸「総司の兄の瀬多洸夜だよろしくな菜奈子ちゃん」

俺は出来るだけ笑顔で自己紹介をした。子供が怖がらせちゃ駄目だからな最初が肝心だ。

菜「・・・//」

顔を赤くして堂島さんの後ろに隠れる菜奈子ちゃん

・・・なぜだ？顔が怖かったのか？等とショックを受けている俺

総「兄さん・・・いい加減に顔がいいの自覚してよ」

洸「何！いやいや居たって普通だろう！」

モテた試しもないんだぞ？顔がよかつたら彼女が何故出来ない！

総「・・・ハア〜」

あれくの果てに、ため息まで吐かれる始末だ。

そんな菜奈子ちゃんを見た堂島さんは

堂「ははは！なんだ？お前照れてんのか？」

菜「／／／／」

バチン！

と思いつ切り堂島の尻を叩く菜奈子ちゃん・・・あれは痛い

あれから現在、俺達は車の中にいる。俺は窓から景色を眺めていた。

菜「お父さん・・・」
そんな中菜奈子ちゃんが堂島さんに話かける。足をもしもじさせながら

洸「（あゝトイレだな）」

堂「ん？トイレか？」

ドス！

そう言つと菜奈子ちゃんに横腹を殴られる堂島さん
そりゃ怒るでしょ。

そして、近くのガソリンスタンドで車を止めて車から降りる俺達

店員「いらっしやませー！」

堂「ガソリン満タンで頼む」

店「はい、ありがとうございますー！」

堂「ほら早くトイレ行っていい」

そう言つと菜奈子ちゃんはトイレに走って行く

店「トイレは左ね、左って分かる？お箸持たない方ね」

菜「菜奈子、子供じゃないよ。」

そう言つとトイレに走っていく

店「何処かお出かけで？」

堂「いやコイツ等が今日都会から来たんで迎えに行つてたんだ。ふ
く俺も一服してくるか」

そう言つとタバコを吸いに行く堂島

店「へへ君達、都会から来たんだ、ここ田舎だから何にもないっし
よ」

泷「確かに何も無いが空気はいいな」

総「確かに」

て言うか仕事しなくて大丈夫か？すると店員が総司に目を向ける

店「それに見た所、君は高校生だよな。高校生ったら部活やバイトぐらいしか無いでしょ？今、内のスタンドバイト募集してんだ。よろしくね」

そう言うのと、店員は手を差し出す。遠回しにバイトの勧誘か・・・

総「よろしく」

その手を笑顔で握る総司

店「そっちのお兄さんも」

そう言うって俺にも手を差し出す店員。

洸「（断る理由もないし）ああ、よろしく」

そう言うって、俺も手を握り返す。

店「!?!?・・・君」

俺が手を握り反した途端
店員の表情が変わる

洸「?・・・なんだ?」

店「・・・いや!何でもないよ」

店員と喋っていると、菜奈子が戻ってきた。

店「おっと、僕も仕事しないと」

そして、作業に取り掛かる店員、その時

総「ぐっ!」

洸「!?総司どうした?」

菜「具合わるいの?」

突然頭を抑える総司に心配する俺と菜奈子

総「・・・いや、大丈夫
少し立ちくらみがしたただけだから」

堂「ん？どうした」

堂島さんも一服から帰ってきた。

菜「調子悪い見たい」

堂「長旅で疲れたんだろ。今日は家に着いたら飯食って早く休んだ方がいいな」

総「・・・すいません」

堂「そう他人行儀になるな短い期間だが、俺達は家族だ」

洸「そうだぞ。お前は少し遠慮しすぎだ」

堂「そう言う事だ。分かったら全員早く車に乗れ行くぞ」

こうして、俺達は堂島宅に向かう。

堂島宅に着いた俺達は現在夕食を取っていた。
スーパーの惣菜とかがだが、今日は仕方ないと思うがごみ箱を見て見ると、惣菜のパックのゴミばかりこれは、育ち盛りの菜奈子ちゃんにはマズイだろう。
後で総司と話し合いな。
そして、何気なくテレビのニュースを観ていた俺達

ア「今日から明日に掛けて稲羽市は霧が濃くなるでしょう」

総「霧？」

何気なく呟いた総司

堂「ああ、このところずっと霧が出るんだ」

へへやっぱ温暖化が原因かもね。

P i P i P i

すると堂島さんの携帯が鳴る

堂「もしもし・・・ああ分かった今から行く・・・飲まなくて正解だったな」

そう行ってコートを持って出掛ける準備をする堂島

菜「お仕事？」

堂「ああ、帰りは遅くなりそうだから先に休んどいてくれ。洗夜、
総司、戸締まりとか頼むぞ」

総「はい」

洗「了解」

そう言うと、出掛ける堂島警察だからね忙しいだろ。

菜「・・・」

まずい・・・空気が重いなこう言う時は。

洗「総司、後は頼む。」

総「え！？」

泷「お前は菜奈子ちゃんとは打ち解けて無いだろ。と言つ訳でお休み」

俺はそのまま2階の部屋（ちなみに総司の部屋は俺の向かいだ）に待避する後ろで総司がなんか言っているが知らん。

子供は一對一の方が喋り安いんだよ・・・多分。

そして、部屋に着いたら

そのまま布団に入る。

泷「今日は別に変わった事は無かったが・・・油断は出来ないな明日から少し引き締めないとな」

そう言つて眠りに着く俺

泷「何処だここは？」

俺は部屋で眠っていた筈だったが、気付いたら周りが霧で覆われている空間にいた。

右手には影時間の時に使っていた刀そして、ポケットには銃の形をした召喚器

どちらも部屋に置いてる筈だからここに有るわけがないんだが・・・

泷「・・・」

俺は周りを警戒しながら、前にゆっくりと進んで行く

どれくらい歩いただろうか不思議な事にいくら歩いても疲れがない。
そう思いながら進んで行くと目の前にはいつの間にか扉が在った。

泷「・・・行くしかないよな」

俺は自分に言い聞かせ、扉の先に進む。

泷「ここも同じか」

扉の先にも、霧に覆われた空間しか無かった。
・・・その時

？「やあ良く来ましたね」

泷「!?!?・・・俺をここに呼んだのはお前か」

俺は霧の向こうにいるまだ見ぬ者に語りかけた。

？「そう、貴方には興味がありましたからね」

洸「そいつは、うれしいね誕生日でも教えてやるつか？」

？「いや、それはいいよ。私が興味有るのは貴方の力の方だからね。他の者達とは少し違う力を私は見てみたいんですよ」

こいつペルソナ能力について知っているのか。

それに口調からして俺とは初対面じゃないかもな。

洸「なんだったら俺の力、試してやるつか？」

？「ふふふ、貴方では私に触れる事すら出来ないでしょう」

？に見下した風に言われる俺。

ここまで言われたら、引き下がる訳にはいかないな。

洸「後悔すんなよ」

そう言うと俺は、召喚器を取り出し頭に突き付ける

？「そんな物が無くても、貴方は力を使えるでしょ。」

流「確かに使えるが、せつかくだからこれを使う事にするんだよ」

懐かしいなこの感覚。

それにこれも二年前の思い出の品だからな。

そう思い俺は引き金を引き叫ぶ。

流「オシリス！ムラサキシキブ！」

すると、朱い仮面を付けた大剣と翼を持つペルソナと周りに羽衣を浮かせて、本を持ち和服を着たペルソナが現れる。

？「・・・二体同時ですか」

流石に少しは驚いた様だなこればかりは、『あいつ』にも勝つてたし、だが同時召喚はかなり疲れたよな・・・だから早めに蹴りをつける！

流「いくぞ！まずは動きを止める！」

『マハラギオン！』

そう言つてムラサキシキブに技を出させながら、俺は？に刀を構えながら走り出す。巨大な炎は周りの霧を飲み込みながら、？を襲う

？「ぬうう・・・」

そしてオシリスで追撃！

オシリスの持つ大剣から斬撃を連続で繰り出す。

『木っ端微塵切り！』

？「ぐっ！」

洸「もらったああああ！」

そして俺は？に刀を抜刀しながら走り、？を切りかけた。・・・
筈だった。

「（・・・手応えがない！？）」

どう言う事だ？確かに切った筈。
等と考えている俺

？「ふふふ、だから言ったでしょう。いくらやっても無駄何ですよ」

洸「少しショックだな・・・！？」

なんだ？突然頭が・・・

？「どうやら、ここまでの様ですね」

その言葉と同時に周りの景色が歪んできた。

？「ではさよなら。貴方の行動を楽しませてもらいますよ」

洸「まで！お前は・・・一体・・・」

そう言いながら、俺の意識は途切れた。

――――

洸「はっ！・・・ここは」

辺りを見回すと、俺は自分の部屋にいた。

そして部屋の角に置いてある二年前から使っていた刀そして机には

召喚器、寝る前と何にも変わってなかった。

「ただの夢・・・じゃないよな・・・イゴール、今回ばかりはかなりヤバそうな気がしてきた」俺の呟きは部屋の中へと消えた。

事件の幕開け（前書き）

今回は日常だけです

事件の幕開け

現在、俺はジュネスの家電コーナーにいる。

え？理由？いやだつて叔父さんは仕事だし総司は今日から学校、菜奈子ちゃんも学校つまり暇なんだ。

つて言うけど本音を言つと昨日の夢が気になったんだよ。

俺の勘が正しければ今日、この町で何か起こるだろう

洸「にしても・・・田舎だから商品は期待してい無かつたんだが、結構あるな」

新型の大型テレビに冷蔵庫その他諸々

洸「にしても買い過ぎたな・・・」

現在、俺の両手には食材等が入った買物袋で埋まっている。

インスタントだけじゃ栄養がなさすぎるからな。

家電コーナーに居るのは、ただ偶然だ。そんな事を思っていると

店「おめでとつございます！三等のゲーム機をどうぞ」

洸「ん？」

どうやら、福引きをやっている様だな。

一等の商品は新型のテレビが二台か、つまり一等は二つか。

店「あ！お客さんもどうですか？」

俺に気付いた店員が俺にも福引きを勧めてくる。

泷「はは、やりたいけど生憎、福引き券を持ってないんだよ」

店「大丈夫ですよ！お会計の値段で決まりますから。5000円で一回なのでお客様は・・・」

店員にレシートを渡す俺のレシートは10、250円つまり二回か。

店「お客さんは二回ですね」

そう言って箱を差し出す

店員、どうやら箱からクジを取るタイプの様だな

泷「んじゃ、お言葉に甘えて・・・」

そう言って、箱からクジを引く俺。さてさて何が出るかな俺は箱か

らクジを二つ選んで店員に渡す

店「はい！ではお客さんのは・・・え！すごい！一等ですよ！」

そう言つて驚く店員

つか！？マジで！やったじゃん！、周りからも祝いの言葉を貰う俺。

洗「でも、持つて行くの

大変だし住所を教えるから運んで貰うと助かるだけど」

店「はい！大丈夫ですよ

後もう一つのクジもみてみますね」

そう言えばクジを二つ引いたの忘れてた。

店「え」と・・・え！嘘！こんな事つて・・・」

突然、様子がおかしくなる店員。どうしたんだよ一体

洗「おい、どうしたんだ？」

店「その、このクジも・・・一等・・・です」

洗「・・・マジで？」

いやー一生分の運を使ったかも知れないな。

ちなみに現在、俺は近所を散歩中だ。

あと当てたテレビは二台とも堂島宅に送ってもらった今日の夜に届く予定らしいって言うか田舎だからって早過ぎじゃないか・・・

そう言えば店員が泣いてたな完全に赤字だし。

そんな事を思っていると、何やら辺りが騒がしい。

すると前の辺りでパトカーが止まっている

洗「（なんだなんだ事件か？・・・ん？よく見ると総司と叔父さんもいるじゃん後見知らぬ美少女も）」

そう思いながら、総司達の元に行く

洗「よっ！総司、今帰りか！叔父さんも仕事ご苦労様」

？「え？誰この人なんかすっごい格好いいんですけど」

俺の言葉に緑のジャージを着た女子生徒が反応する

そして俺に気づく総司

総「ああ、この人は僕の兄さんなんだ」

？「え？お兄さん！？」

洸「そうだよ」総司の兄の瀬多洸夜だ。よろしく」

里「あつども私は瀬多君のクラスメイトの里仲ちえです。そしてこっちは」

里仲は隣にいる大人しい紅い制服を着た女子生徒に目を向ける。

天「天城雪子です・・・」

何処か病弱そうなイメージが尽きそうな子だな・・・それにしても二人とも、かなり美人だな。お前・・・転校初日で二人も口説くとは。

洸「美人を二人も・・・両手に花だな総司」

そう言って親指を立てる俺

里・天「「び、美人!?」」

俺の台詞に二人とも顔が赤くなる。いやゝ初々しいね

総「兄さん・・・またそうやってからかって?」

洸「からかってないぞ!

美人に美人と言って何が悪い!」

里・天「「////////」」

俺の台詞に更に顔が赤くなる二人

洸「全く、俺が入学した時は入学式当日にクラスにいた女子を口説いたぞ」

総「そんな事をするのは、兄さんだけだよ」

そんな俺の台詞に少し呆れ顔の総司

堂「って言うか、何でお前ここにいるんだ?」

今まで沈黙を守っていた。堂島が俺に話かける。

洸「散歩だよ。そっちこそ何かあったの？」

堂「一般人に教えられる訳無いだろ」

確かにでもこつちも、昨日の夢の事も有るしどんな事でも情報が欲しいからな、適当にカマでも掻けるか。

洸「と言つても殺人でしょ」

俺の台詞に堂島は表情が変わる。

堂「な！？お前何処でそれを聞いた！」

・・・殺人か

洸「いや適当に言っただけ何だけど・・・」

堂「あ！お前カマ掻けたな！・・・全く早く帰れよ」

洸「叔父さんもね今日、家に帰ったらいい物があるよ」

堂「なんだ？いい物って？」

洸「帰ってからの楽しみだよ」俺の言葉に頭が捻る堂島

堂「なんだかわからんが
出来るだけ早めに帰るって菜奈子にも言っといてくれ・・・おい！
足立いつまで吐いてやがる！いい加減にしろ！！」

そう言って近くで吐いている刑事を一喝する堂島

足「うぶっすいません堂島さん・・・」

洸「さて俺も帰るか総司も早く帰れよ、里仲さん天城さんもまたな」

里・天「え！あっはい！さよなら」

そう言って両手に買物袋を持ちながら帰る俺

・・・今回の事件ペルソナやシャドウが関係してるかは、現時点では何にも言えないな。だが・・・これだけは解るとんでもない事がこの町で起ころうとしている事だけはな。もう目の前で誰かを失ってたまるか。

そしてその夜、二台の新型テレビを見て堂島は驚き。菜奈子は喜び。総司は苦笑いしていた。

そしてテレビの内、一台は一階に、もう一台は俺の部屋に置く事になった。

目覚める力（前書き）

少し無理矢理かも知れませんか？

目覚める力

最初の殺人事件の被害者は山野真由美と言うアナウンサーだった。彼女は政治家の秘書である生田目太郎との不倫騒動である意味で時の人だった。そして、容疑者候補である生田目太郎とその妻、柊みすずにはアリバイがあり
犯行は不可能とされており容疑者の目星は現在ついてないらしい。

洸「マヨナカテレビ？」

現在、俺は自分の部屋で
総司から話を聞いていた

総「うん、深夜0時にテレビを見ると運命の人が見れるって友達に聞いたんだ」

あるよな、そんな都市伝説

洸「胡散臭いな・・・暇つぶし程度でしか試さないだろ普通」

総「う、うんそうだよな」

そう言いながら、何処か
上の空な弟

洸「何か悩み事か？」

総「・・・いや悩みって程の物じゃないよ」

洸「いいから、話してみる伊達にお前より長く生きて無いぞ」

そう言つと総司は意をけした様に

総「兄さん・・・人って

テレビの中に入れると思う？」なんて事を聞いてきた

洸「・・・何？突然中二病発言してんのお前。慣れない環境で疲れ
たか？」

流石の俺でも、そんな非現実的な事を言われると返事に困る。ペル
ソナとかは別として

総「いや良いんだ。ごめん変な事聞いて、もう部屋に戻るよ」

そう言つて、部屋に戻る

総司

洗「・・・なんだったんだ？」

そう言うと俺は何気なく窓の外を見る

洗「・・・また霧が出ているのか」

そして時計を確認する

洗「(もうすぐ深夜0時か・・・マヨナカテレビー応確認してみるか)」

嫌な感じがした俺は、何故かマヨナカテレビが気になった。

そしてテレビの前に移動する。すると

ザ、ザザー---

洗「!?!?う、映った・・・」

砂嵐が少し収まりながら、段々と人影が映り出した。

洸「この服は確か・・・」

すると画面には女性らしき人が映った。だか、俺が気になったのは彼女の着ている服だった。

洸「（この服は総司の学校の女子生徒の制服だった筈偶然なのか？）

」

それに、この女子生徒も何処かで・・・何処だったかな・・・そんな事を思っている、ある事を思い出した。

総「テレビに入れると思う？」

洸「総司のあの言葉そしてマヨナカテレビ・・・」

イゴールは総司も今回の事件に巻き込まれるみたいなき事を見た。そして今考えれば、あいつは意味なき事をわざわざ口に出さない。つまり、総司・・・お前既に何かに巻き込まれてるな

となるとやる事は一つ

そう思い俺は、テレビに手を触れるすると

洗「ビンゴだな・・・」

手はテレビの中に飲み込まれていた。

洗「そうと、分かればテレビの中の探索は日が昇るを待ってからだ
な」

そう言うと俺は布団に入り休む事にした。

洗「（それにしても、テレビに映っていたあの女子生徒は一体・・・
）」

今はその意味がわからず眠りについてしまったが、洗夜がその意味を知るのは、すぐの事になる。

朝になり、叔父さんと総司は朝食をさつさと食べて、出掛けた。
今、家に居るのはこれから学校に行くために朝食食べている菜々子
ちゃんと俺だ

洗「菜々子ちゃん時間は
まだ大丈夫だから焦らずに食べなよ」

菜「うん、ありがとうお兄ちゃん」

そんな風に笑顔で言う菜々子ちゃんを見て和んでいると・・・

ア「臨時ニュースをお伝えします。先日何者かに殺害された山野真由美さんの第一発見者だった小西早紀さんが今朝、遺体で発見されました」

そして映し出される写真を見て、俺は絶句した。

洸「な！？（この女子生徒はマヨナカテレビの）」

そつだ・・・思い出した。彼女は最初に殺害された

山野アナを最初に見つけた発見者として、この所メディアに取材を受けていた子だ。

菜「また、事件なの・・・」

そつ心配そつに言う菜々子ちゃんに俺は

洸「大丈夫だって！菜々子ちゃんには俺や総司そして叔父さんが着いてるから心配は要らないよ！菜々子ちゃんに何かあったらすぐに

駆け付ける・・・約束だ。」そう言って指切りをする　俺と菜々子ちゃん

菜「！・・・うん約束だよ！」

そう言って笑顔で指切りをする菜々子ちゃん。

それにしても、最初に死んだ山野アナはアンテナに吊されていて変死。

そして、その第一発見者で発見者である小西早紀さんが殺害された。それに、彼女はマヨナカテレビに映っていた。まさか・・・

洗「ねえ菜々子ちゃんマヨナカテレビって知ってる？」

菜「うん、知ってるよ菜々子のお友達も皆知ってるよ」

洗「もしかしてさ、今テレビに映ってた。山野アナもマヨナカテレビに映ってた？」

菜「菜々子は見えて無いけどお友達がそんな事言ってたよ」

やはり、となると鍵を握るのはマヨナ「あああああ！・・・！」

突然叫ぶ菜々子ちゃん

泷「ど！ど！どうしたの！？」

菜「時間！菜々子、学校遅刻しちゃうよ！」

と、泣きそうに為りながら時計を指差す菜々子って！そんな呑気な事言ってる場合じゃねええ！

泷「マジ！仕方ねえ！菜々子ちゃんヘルメットかぶって俺のバイクのサイドカーに乗れ！」

菜「え！？いいの！」

泷「緊急事態だからいいの」

え？危ない？と言うかバイクいつ手に入れた？

細かい事は気にするな！

堂島さんには内緒だよ

キモい？余計なお世話だ！

菜々子ちゃんを何とか送ってから数時間後
俺は現在、自分の部屋でテレビに入るための準備をしていた。
右手には刀を挿し腰には召喚器。

洸「全く、テレビが当たって正解だったな」

このぐらいのサイズのテレビじゃなきゃ全身は入らないからな。
そう言つと俺は表情を引き締めてテレビの中に入る。

洸「さてさて鬼が出るか蛇が出るか、それとも・・・影が出るか」

洸「ここがテレビの中か」

周りには霧と広い空間

洸「何がいるかこちらからじゃ分からない・・・なら」

俺は静かに集中しペルソナを呼ぶ。
誰もいないところで、わざわざ召喚器を使う意味も無いしな。
あれはあれで隙がでかい。

洸「ロスト！」

現れたのはボロボロの黒いマントを纏い、手には刃こぼれした鎌そ
して顔は骨のペルソナが出て来た。

洸「ロスト、頼む」

俺がそう言うとロストは俺の周りに纏わり付く様にして消えた。

55

『ロスト』は戦闘向きの
ペルソナでは無いが相手の能力を調べたり、ダンジョンや敵等の居
場所を調べたりする事に能力が長けている。
そしてロストにはジャミング能力があり、ロストがいる限り相手に
居場所を悟られる事はない。

洸「これで安心だ、さて
これから「キ・・・キミたち・・・何でまた来たクマ!？」ん？な
んだ」

何処からか声が聞こえる

下の方からだな、どうやら下の方にも場所があるようだ。

？「へへへ・・・ちよつと眞実を掴みにね」

ん？あれは！？総司！それと見知らぬ男子たしか総司が言っていた、たしか花村ってヤツそれと・・・クマなのか？
その時は俺はクマ？の台詞である事に気づく

洸「総司の奴やっぱり此処に来た事があるのか・・・あのクマの言葉によれば

総司達が此処に来たのは
まだ最近だな・・・」

くっ！それにしても人が増えたから声が聞きにくい。俺はよく耳を澄ませる。

クマ「分かった！君達こそ此処へ人を入れてるヤツに違いないクマ
アアッ！！」

花「っざけんなツツーの！俺たちはその犯人を突き止めにきたんだ
よー！」

そう言っつてクマ？に怒鳴る花村

洸「・・・あの花村って奴、自覚が在るのか分からないが口調に少し楽しさ混じりがある。無意識かも知れんが、この非現実な世界を楽しんでる感があるな

ガキが！人が死んでるんだぞ！総司もなぜ止め無かった！」

俺は花村の緊張感のない感じに怒りを覚える。

その時

洸「（ん？あいつらクマから何か貰ったな。おっと、どうやら移動する様だ。）」
下の方では総司達が何処かに移動した。

洸「（今、出ていってもいいが・・・少し気になるな様子を見るか）」

そう言っただ俺は静かに下に下りる。

洸「さてと、あいつらはどっちに、ん？」

俺は床に何か落ちてている事に気づく。

洸「（なんでメガネ？）」

それは黒いメガネだった。俺は少し気になりメガネを掛けてみる、すると・・・

泷「霧が無くなった!？」

俺はメガネを外してみる
外すと霧は確かにある。

泷「なるほど、此処では
これがキーアイテムか
ふ、悪いな借りてくぜ」俺は誰もいない場所にそう言って、総司達
を追う。

――――
泷「此処は商店街？」

総司達を追い掛けていたら稲羽市の商店街にソックリな場所に出た。

泷「(元々こう言う世界なのか、それともイゴール達が言っていた
事件の影響なのか・・・この世界の情報が少ないな)」

タルタロスの時は美鶴たちが教えてくれたあの時とは状況が違うかな。

おっと！

俺の前方に酒屋らしき場所で立っている総司達を見つけた俺は急いで身を隠した。その時だった

ク「ま・・・待つクマ！

そこにいるクマ！！やっぱり襲って来たクマ！」

そのクマの台詞と同時に
ワイトも騒ぎ出す

洸「この感じ・・・まさか！」

花「？いるって何が？」

ク・洸「『シャドウ！』」

その言葉と同時に酒屋の扉から仮面をつけた黒いドロドロした物が出て来て。

それが丸い球体に口がありその口から長い舌が出ているシャドウー
ー
ー『失言のアブルリー』が現れる。

花「うわ！」

総「花村！」

シャドウに吹っ飛ばされる花村。

総「このおお！」

ドガア！

そう叫ぶと総司は手に持っていたゴルフクラブでシャドウを殴る総司だが

『ヒヤアア〜』

シャドウはダメージを受けてる様子がない。

洸「無駄だ総司、ペルソナ能力に覚醒してない者の攻撃はシャドウには効かないぞ」

俺はその様子を離れた場所から様子を見ていた。

洸「だが・・・そろそろ危ないな（花村とクマは戦力外、総司・・・
お前はペルソナの力には目覚めない様だな）」

そう思い、三人の元へ行こうとした時だった。

ポウン！

花「な、なんだああ！」

洸「！？あれは・・・」

突然、総司の周りを包む様に光があり、その手には一枚のカードがあった

総「ペ・・・ル・・・ソ・・・ナ」

そう呟きそして

手のカードを握り潰す様に握る。

バリイイイン！！！！

カツ！！！！！！！！

総「うああああッ！！！！」

その叫びと共に
仮面を付け学ランの様な服に大剣を持つペルソナー……イザナ
ギ』が現れる

洸「あれが……あいつのペルソナ……」

俺は現在の光景に驚いていた。

そして理解した……イゴールがあいつに頼んだ理由もそしてこの
事件解決には総司の……弟の力が必要なのだと言つ事を。

総「うおおおおお！」

そして総司はそのまま

ペルソナを使い、まず目の前のシャドウをイザナギが大剣で両断する

ズバアアアア！

バシユウウウ

そして、その音と共に消えるシャドウ

そしてそのまま、目を残ったシャドウに向ける

洸「イザナギ！」その台詞に答えるかのようにイザナギは雷を放つ

『ジオ』

ドオオオオン！

そしてシャドウを全て殲滅した。

洗「・・・総司、お前の
デビュー戦、カッコ良かったぜ」

俺はイザナギから放たれている光を眺めながら
そう呟いた。

我は影、真なる我（前書き）

お気に入り登録が14件

自分が思ってたよりも多くてビックリです！

我は影、真なる我

洸「それにしても、全く心配させやがって……」

俺は総司達から見えない
位置でそう呟く。

だけど今の俺の顔、多分

ニヤけてるな、何だかんだで弟の成長は嬉しいから……

洸「（だが、総司……

ペルソナを出したからにはもう後戻りは出来ないぞ）」

そう思いながら俺はペルソナを一旦、消した総司達の様子を見る

ク「さっすがセンセイ！」

総「セ……センセイ？」

クマの突然のセンセイ発言に困惑する総司

ク「この世界に入ってこれたのもセンセイの力が、こんな凄い力を持つていたなんてオドロキね！な、ヨースケもそう思うだろ？」

花「何、急にため口になってんだチヨ―シ乗んなよ！」

ク「むぎゅー！」

そう言つて殴られるクマ

洸「（・・・全く呑気なものだなシャドウがいるかも知れないのに・・・だが

クマよペルソナ能力はお前が思つてるような物では無いぞ。この力は誰かを守れる力にもなるが、それと

同時に誰かを傷付ける力にもなる、そしてこの力で苦しんだ者達を知っている）」

俺が二年前の戦いで唯一

助けた・・・いや俺は何もしてないな・・・あれは

順平の奴が頑張ったんだ

そう言えば順平や千鳥ちゃん、そして美鶴・・・あいつら元気かな・

・
・

そんな事を思いながら、黄昏れていた時だった。

――ジュネスなんて潰れればいいのに――

――娘さんがジュネスで働いているなんてご主人も苦労するわね

えー

ー困った子よねー

突然、何処からか声が聞こえてきた。

洗「(何だ!?!この声は・・・人だよな。でも、まるで陰口のような・・・)」

突然の声に警戒する俺

花「何だよこの声・・・

ーッ!!おいクマ!

ここは・・・ここにいる者にとっての現実だとか言ってたな、それって・・・ここに迷いこんだ先輩にとっても現実って意味なのか?」

成るほどな・・・此処が

そういう世界ならば、総司達の言う通り彼女がこの世界で迷いこんだなら多分

この声は・・・

花「これが・・・先輩の・・・」

花村はそのまま顔を下に向ける。

洸「・・・殺害された彼女が自分の理想と違っている事に気づきたくないといった所だな」

俺は花村の様子を見ながらそう呟き。

総「とりあえず、中に入るぞ」

何とか場の空気を帰るためか、話を切り替える総司そして酒屋の中に入って行く総司達。

洸「（入口辺りで様子を見るか。慎重にな・・・）」

そう言っただけで入口の近くまで近く俺

え〜っと、中の様子はつとそして入口の影から中の様子を見る。

『私ずっと花ちゃんの事』

洸「（ん？誰の声だ女性の声みたいだな・・・）」

花「この声・・・先輩!？」

洸「(先輩?と言う事は

この声は亡くなった小西早紀か・・・)」

花「え?って言うか先輩

俺の事!？」

洸「(ふっ、どうやら二人は両想いだった様だな・・・ならばあの花村って奴もある意味被害者か)」

小「うざいと思ってた』

洸「(そうそう、うざい・・・え?)」

花「・・・え?」

小「仲良くしてたのは店長の息子だから都合いいってだけだったの
に・・・
勘違いして盛り上がって・・・ほんと うざい』

花？『何、言ってるだよ
俺はお前だあ！だからお前の事は全部お見通しなんだよ・・・』

洸「（この世界は此処にいる者にとっても現実になるならば・・・
あのシャドウが花村陽介と言う人物の
現実だと言う事になるな・・・つまり奴は現在、心の中の本当の自
分と向き合っていると言っても過言じゃないな・・・）」

そして話しを続ける。

花？『此処に来たのもお前は単にワクワクしたんだ！小西先輩のた
めにこの世界を調べに来たなんてのは
ただの口実さ！大好きな
先輩が死んだつてのにな！』

総「・・・花村」

ク「・・・ヨースケ」

花「ち・・・違う・・・」

やはりか・・・あの花村と言う奴は話す度にその言葉の中に楽しさ
やワクワクした様な感じの言葉になっていた。

例えるなら、幼い子供が明日に遠足や遊園地等に行く時にその前日、本人は普通にしているつもりだが、口調や態度で楽しみなのだと周囲が知る様な感じだ。
その証拠に奴は、この場所に来るまで顔が全く落ち込んでいなかった筈だ。

まるで新しい遊び場を見付けた様な顔だ・・・。

そんな事を思った時だ。

花「違う！お前なんか俺じゃね！！！！」

花？「くくく・・・はははははははははは！！！！そうだ！俺は俺だ！！！！だから全部ぶち壊してやるよ！！！！」

花村の言葉が引き金となり花村？の周りに闇が集まりそして上半身は顔は黒く

マフラーをつけ、そして

下半身は緑色の巨大な化物になりその姿はまるで

ヒーローを連想させる様なシャドゥー『陽介の影』が出現する。

花？『我は影、真なる我

ははは！！！！全部！俺がぶち壊してやる！！！！』

花「あ・・・ああ・・・」

総「！？花村！隠れてろ！」

余りの事に頭が追いつかない花村に総司は指示を出す

洸「（総司、今度のシャドウはさっきのシャドウと違って力押しだ
けじゃ勝てないぞ・・・）」

俺のそんな思いとは裏腹に総司はシャドウに攻撃を仕掛ける。

総「うおお！」

花？「なんだ？お前・・・目障りなんだよ！！！！
食らえ！」

『忘却の風！』

シャドウがそう唱えると
突然、強烈な風が吹き総司を襲う。

総「うわあああ!?!」

その風に吹き飛ばされ床にはいつくばる総司

ク「センセイ!?!」

花「瀬多!」

洗「やはりな・・・ペルソナやシャドウには属性があり、ペルソナ使いは己のペルソナによって弱点属性が変わりその弱点属性の攻撃を受けた場合・・・己へのダメージも大きいがそれは相手も同じ事、上級の

シャドウの中には弱点がない者も多いが・・・基本的には、《火は氷に弱く、氷は火に弱い》と言った様に自分の弱点属性が相手の属性だった場合は相手の弱点属性はこちらの属性となる・・・総司、ここからは

よく考えて戦え。さもないと死ぬぞ・・・」

花? 『しぶといな・・・』

とつとと死ね!?!?!」

『チャージ!』

力を溜めるシャドウ

ク「ガードするクマ! 攻撃がくるクマ!」

総「分かった！」

クマの言葉を聞き相手の攻撃に備える総司

花？『死ねよ！！！！』

『忘却の風！！』

先程より巨大な風を受けたが防御していたのでそこまで被害はなかった

総「ふう助かったよクマ」

ク「お安い御用だクマ

センセイはクマがサポートするクマ！」

洗「（ほう、あのクマそれなりに出来る様だなサポート役がいるば少しは楽になる筈だ）」

ク「センセイ！いまだクマ！」

クマの合図で攻撃態勢に入る総司

総「イザナギ！」

『ジオ！』

ドオオオオン！！！！

花？『ぐわああ！お前えええ！』

クマとの連携で少しずつだがダメージを与えていく二人。

洸「後は、あいつらだけで大丈夫だな、さてと俺は……」

そう言つて後ろを振り向く俺、すると

『ヒヤアア！！』

『ヒヤアア！！』

先程、総司が倒したシャドウの『失言のアブルリー』がいた。しかも大量に

洸「ざつと見て16匹つて

ところか、あれだけの力を持ったシャドウが暴れてるんだ他のシャド

ウが刺激されない訳がないか、だが・・・悪いなこつから先は立入禁止なんでなそれでも入るなら・・・斬るぜ」『ヒヤアア!』

俺の言葉を合図に一匹の

シャドウが襲い掛かってきた。そしてシャドウは舌を大きく振ってその反動を使い舌で攻撃してきたが。

俺はそれをかわして刀で反撃しそのまま両断する

洸「まずは一匹（明彦の拳に比べれば遅いし隙だらけなんだよ!）」

周りに注意しながら俺はペルソナを呼ぶ

洸「お前らごときに時間は掛けられないんだよ！オシリス!」

『マハジオ!』

オシリスが大剣を翳すとシャドウ達に雷が降り注ぐドオオオオン!!!!!!!!!!

そして、シャドウ達は一瞬にして消滅した。

洗「・・・さてと、あっちはどうなったかな」

そう言っただけは酒屋の中の様子を見ると、シャドウは花村の姿に戻っており、花村と向かい会っていた。

花「お前は・・・やっぱり俺なんだ・・・」

その言葉にシャドウはゆっくりと頷き光るとペルソナー―ジライヤになり花村の手にはカードが舞い降りる。

洗「(シャドウが!?)そしてあれはペルソナ・・・奴もペルソナ能力に覚醒したのか・・・もう少しあいつらを見守るか、だがもしこれからの戦いを見てペルソナをヒーローごっこか何かに使っなら、俺があいつらを叩き潰してでもこの

事件から手を引かせる・・・さて、今日はもう帰るかこのままじゃあいつらと

鉢合わせだしな・・・)」

そう言っただけは元の場所に駆け足で戻る。

そして現在・・・悩み中

洸「どうやって帰ればいいんだ？早くしないとあいつらが来るぞ！」

盲点だった！入る時は楽だったから帰りも楽だと思ってたのに！ど
うすれば！！そんな事を考えながら悩んでいた時だったとっさに俺
は手を翳した瞬間・・・

洸「何これ？」

突如、目の前に変な穴が出て来た。何これ！？つか何で俺の手か
ら出て来たんだ！？

その時

三人「ーーーー！」

やば！来やがった！こうなりややけた！
そう思い、俺は目の前の穴の中に入った

洸「・・・此処は？」

俺が目を開けるとそこは俺の部屋だった。
え？戻った？ヤッター！！俺はテレビに勝った！！！！

そんな事をしながら一時間後・・・俺は机の上で考えていた。

洗「あの穴は一体？それに何で俺が出せたんだ。心当たりがある
とすれば夢の中で会ったあの『？』が俺に何かしたか？・・・それ
に花村とか言ったあいつ何でペルソナを・・・」

考えた結果・・・保留

いや、だってわかんないし仕方ないじゃん！

そして現在、俺は机の上でレポートを書いていた。

洗「（今回の事件は多分

前例が無いだろう。だから今回から事件の調査状況とテレビの中で
起きた事を記す事にした方がいいな、
それにもしよ俺や総司の身に何か会った時には、このレポートを美
鶴達に渡して後を託せるしな・・・）」

そう思いながら、レポートを書き留めた俺は何となく携帯を見た。
すると・・・

洗「メールが三件か・・・（二つはメルマガだな・・・後一つは！
？・・・お前か）」

メールの贈り主は

『桐条 美鶴』と書かれていた。

俺は中身を見てみると。

久しぶりだな洗夜

元気になっているか？お前が私達の前から姿を消してから、もう二年だ電話をしてもメールを送ってもお前からの返事が返ってこないが番号やアドレスを変えてない点では安心できる。それかー

そこまで見て、俺はメールを削除した。

美鶴は定期的にメールや電話をして来て俺の安否を確かめる。

返事を返した事はないが・・・理由？ 特にはないが強いて言えば何て返せば

いいか、わからないからな美鶴はメールで『二年の事は誰もお前を責めてはいない』とメールが来ていたがメールや電話じゃ相手の心が解らないからな。

だからと言って会う気はない。

どんな顔で会えばいいか解らないから・・・

そして俺は携帯を机において横になる。

洗「もう・・・昔には戻れないんだよ・・・美鶴」

俺の呟きを聞く者は誰もいなかった。

過ぎ行く日々（前書き）

また日常編です

過ぎ行く日々

洗「・・・釣れないな」

テレビの中での戦いから

二日たっている、あれから総司とは家で話すが至って普通に過ごしている。

どうやら、俺がいた事には気付いていないようだ。

話しが変わり現在、俺は

近所の川で釣りをしている理由はただ単に気分転換だ

洗「・・・今回の事件の裏にあのテレビの世界が

関係しているのは間違いない、きっと犯人は何らかの方法である世界の事を知り犯行に及んだのだろう。ただ問題は・・・犯人はペルソナ使いなのかどうかだ。ペルソナを使うなら対処も変わる、それにあの花村とか言う奴が何故ペルソナに覚醒したのか問題は山積みだな・・・ハア〜」

などと悩みながら釣りをする俺だったが川の上で浮いている浮き見ながら、俺は昔を思い出す。

洗「(皆の前から、消えてもう二年か・・・なのに

いくら無視しても美鶴から連絡が途絶える事はなかったな。何であいつは俺を

許せる？『あいつ』を皆をそして・・・お前の親父さんを目の前でみすみす死なせてしまった俺を・・・いつそ罵倒された方がマシだった。力が有ったのに守れなかった俺は・・・お前の親父さんを見殺しにしてしまった・・・そんな俺を何故、お前は許せるんだよ美鶴・・・」

そう思っていた時だった。ふっ、と後ろで誰かの気配を感じ、俺はゆっくりと振り向くとそこには紅い和服を着た女性がいた。

洸「君は確か総司のクラスメイトの天城・・・雪子ちゃんだったね」

雪「！・・・はい一度しかお会いしてないのに覚えててくれたんですか？」

名前を覚えていたのが、そんなに意外なのか少し驚く雪子ちゃん

洸「弟の友達だからね・・・ところでこんな所で何してんの？そんなにおめかししちゃって」

ちよつと軽い感じで聞く俺

雪「ああ・・・これですか私の家、旅館やってるんです。だから家の手伝いとかでよく着ているんです」

へえ、病弱なイメージから一辺して大和撫子じゃないか……

雪「実は今もお使いの帰りだったんですが……瀬多君のお兄さんが釣りをしているのが見えてその……気になっちゃって、すいません邪魔でしたよね」

いやいや、別に謝る事じゃないし……それに何か

この子、無理してる感じがするんだよな、顔には出さないし誰にも相談しないで自分に言い聞かせる様に

無理をするそんな感じがして美鶴と似てるんだよな……あいつも一人で悩んでたしほっとけないんだ。

似てる言えばあの花村って奴も順平と何処か似てる感じするな。

洸「別に邪魔じゃないさ

ただ、もしまだ時間があるなら、少し話し相手になってくれないかい？学校での総司の様子も知りたいしさ」

雪「え？時間は大丈夫ですけど……いいんですか？」

少し遠慮がちな雪子ちゃんまあ仕方ないか

洸「いいよ、頼んでるのはこっちだしさ」

そう言つて、折りたたみ式のイスを出す俺
え？何処にあつたのかつて？ いやいや釣りをするならイスはいる
でしょ。

二つあるのは偶然！考えたら負けだ。

洸「座りなよ」

雪「ありがとうございます」

そう言つて座る雪子ちゃん

洸「・・・」

雪「・・・」

話しが無いし、空気も重いな・・・仕方ないことは

洸「気のせいだったらすまないけど、もしかして悩みがあるんじゃないかい？」

雪「え！その・・・別に・・・悩みって程じゃ・・・」

・・・ハアゝ総司といい

この子といい、近頃の奴は相談すると言つ事を知らないのか・・・
俺、二十歳なのに爺くさいな

洸「別に遠慮する事じゃないさ。解決は出来ないかも知れないが話しを聞く事は出来る」

・・・なんか恥ずいな

雪「えつと・・・あの・・・私・・・生まれも育ちもずっとこの稲羽の町なん・・・です」

覚悟を決めたのか話しだす雪子ちゃん

雪「それに私の家の旅館って昔から代々続く高級温泉宿なんです・・・そして私はその一人娘・・・」

・・・成る程な

雪「私のお母さんはその旅館の女将だから私も小さい頃から女将修行とかさせられてましたし・・・だからずっとこれからもこの町で生きていくんだって思っちゃうんです」

洸「・・・」

雪「でも！……私、この町が……好きだし、お母さんや旅館の人達も優しい……から」

……美鶴と似過ぎだ。

女将の娘・桐条の令嬢

母親や旅館の人達の為に

女将になる天城 雪子

親父さんの為にペルソナ使いになった桐条 美鶴

雪「でも……たまに思っちゃうんですよね。誰か私をこの町から連れ出してって……」

洸「……そうか」

随分と溜め込んでたんだな

雪「そう思うと……虚しくなるんですよね……自分の将来を既に決められてるそんなのは嫌だ。自分の将来は自分で決めたいって……
・ははは、変ですよね

私、恵まれてるのに……こんな事……思っつのは

洸「……いいんじゃないかい」

雪「……え？」

俺の言葉に驚いた様子の
雪子ちゃん

洸「人つてのはさ・・・
やりたい事何て時が経つにつれて変わるもんなんだよ・・・だから
さ、やりたい事があつたらその度に挑戦した方がいいんだよ後々、
後悔しないようにな・・・」

雪「・・・」

今度は雪子ちゃんが黙って俺の言葉を聞いている

洸「それにさ、多分・・・雪子ちゃんさ結論は既に出てるんだと思
うんだよね、でも・・・まだその結論を受け入れられないんだと思
うんだ」

雪「受け入れられない・・・」

洸「ま！これはあくまで

一人の人間の意見だよ参考にするのもよし！忘れるのもよし！後は
君が決める事だ。あつ！最後にもう一つ」

雪「？」

洸「誰かに相談する事は
いい事はだぞ、ところで時間はいいのかい？」

雪「え？・・・あ！えつと・・・もう行かないと！すみません私もう
行きます」

そう言つと雪子ちゃんは
駆け足で移動する。

洸「気をつけてかえりなよ」

そう言つて俺は道具を片付けて帰る準備をする
すると

雪「お兄さーん！今日はありがとうございました！私！友達とか
に相談したりしてみます！」

そう言つて、ふり向いて

お礼を言つ雪子ちゃんの姿があつた。

そして俺も手を振る

と言つか今日の出来事で彼女の印象が凄く変わったな

そして現在、俺は道具を
持ちながら家に帰っていた

洸「（・・・なんだかんだであんな事言ってしまったが、今思えば
美鶴からのメールの中に相談事とかあったのかも知れないな・・・
あいつ、ちゃんと誰かに相談とかしてんのか？アイギスと千鳥ちゃ
んは話しがずれそうだな、明彦と順平は例外・・・妥当なのは、ゆ
かりと風花だな、だがあいつが相談何てする柄かよ・・・）」

そう思うと何故か、俺は
携帯を出していた。

「（・・・どうする？気になってメールを送ろうとしたが何て送る
？二年間ずつとあいつ等から逃げていたし連絡も無視していた。
今更何て言えはいいんだ！だが・・・って言うか何で！俺は
美鶴の事をこんなに気になってんだ！！・・・くそ！もうやけだ！
無難に元気か？でいいか）」

何やってんだ・・・俺は

この間、部屋で言った。

『もう、昔には戻れないんだよ・・・美鶴』あの台詞が馬鹿見たい
じゃないか！！そう悩みながら俺は帰宅してしまった。

余りの不審な行動に菜々子ちゃんからは心配されて、総司からは人
生相談を何故か受けた。

美鶴視点

美「（ん？メールか・・・一体誰から・・・！？洗夜・・・今までメールや電話をかけても、連絡を返さなかったのに・・・何かあったのか・・・）」

そう思い、不安になりながら私はメールを確認するがその内容を見たら、顔に笑みが浮かぶ。

美「全く・・・いくら連絡をしても返事を返さなかったのに・・・突然こんな返事を返してくるとはな」

にしてもこの内容は・・・それはこちらの台詞としか言えないぞ。

美「だが、安心したぞ洗夜お前は変わりはないようだな・・・（今度はメールではなく直接会いに来て皆

お前の事を待っているんだぞ勿論、私もだ・・・）」

そう言っつて携帯を置く美鶴そして開いた携帯から文章が見えた

お前は一人じゃない

だからたまには誰かに相談しろ

美鶴視点

END

友達（前書き）

書き方を変えて見ました。

友達

洗夜視点

「・・・は？今なんて」

現在、俺は家に居たんだが叔父さんからの電話が掛かって着て現在に至る

「いやだからな・・・」

総司の奴が友人と一緒に補導されて今な・・・警察署にいるんだ・・・」

叔父さんからの電話を聞いて頭痛がしてきた・・・

ただでさえ、事件やペルソナとシャドウそしてマヨナカテレビ・・・問題が山積みなのにあいつは・・・

十中八九、一緒に補導された友人は花村だろ・・・全くペルソナに覚醒して事件解決を目指すのはいいが叔父さん達に迷惑をかけるな・・・

「わかった、今から迎えに行くよ」

「俺も忙しくてな・・・兄貴のお前だけに苦勞をかけてすまんな・・・」

「大丈夫だよ、それに
総司もわざとじゃないと思う」

「確かにあいつがあんな馬鹿をするとは、俺も信じたくないしな」

「そう言う事・・・じゃあ切るよ」

「わかった、じゃあ頼むぞ洗夜」

そう言って電話を切る叔父さん

「・・・総司、今回の馬鹿騒ぎは昨日のマヨナカテレビが関係して
るんだよな」

そう言って俺は昨日のマヨナカテレビの内容を思い出す。

昨日の夜

俺はあの日からずっとマヨナカテレビの内容をチェックしていた。
次に狙われる人物が特定出来ればその人を守る。

上手くいけば、犯人を捕まえる事が出来るかも知れないから・・・
もう、これ以上・・・誰の命も奪わせるものか。そう思っていた時
に、昨日の事件が起こった。

『こんばんは』

えーと今日は私、天城雪子がなんと!“逆ナン”に挑戦したいと思います！題してー！』

その台詞の後にでかでかと題名が出て来る。

「やらせナシ！雪子姫、

白馬の王子様さがし！」

「・・・なんだこれは？」

余りの事に頭がついてこない。だが、ロストが騒いでいるからこの雪子ちゃんがシャドウだと言う事はわかる。

『もお超本気イ！見えないトコまで勝負仕様・・・』

そう言って下の方を隠す

雪子ちゃんのシャドウ

こらこら、女の子がそう言う事をしちゃ駄目だろ。

『もお私用のホストクラブをぶっ建ててるくらいの意気込みで、じゃあ行ってきま〜す！〜！』

そして話しが戻って現在

「彼女のあのシャドウ・・・花村の時と状況が同じとすると既にテレビの中か・・・」

そしてあちらの世界は確かこちらの世界に霧が出るときはテレビの中の霧が晴れてシャドウが暴れる・・・つまり助けるならばこちらの霧が出る時までには助けた方がいいな。
そう言っただけ俺は玄関の鍵をかけて外に出て、バイクにまたがる。

「（・・・だがその前に弟達を迎えに行くか、少し確かめたい事もあるし）」

そう思い、俺はバイクを
警察署に走らせる。

洗夜視点 E N D

総司視点

「全く俺がいたからよかったものを・・・」

「す・すいません」

現在、俺と陽介は警察署で叔父さんに怒られていた原因はこれかのテレビの中の戦いにゴルフクラブだけでは心許ないと言う事で、陽介がジュネスの倉庫から模造刀を持ってきた。そこまではよかったが陽介がそれを振り回していた所を警察に見られてしまい現在にいたる

「お前はこう言う事するようには見えなかったんだがな・・・」

今だ信じられないと言った感じで話す叔父さん

「すいません・・・今度から気をつけます」

「え！？いや・・・その

今回は俺が悪かったんで

あんま、コイツの事、叱らないで下さい」

俺の言葉に弁解する陽介

「まあ今回は何とかなったが次はどうなるか解らんからなあんま、問題を起こすなよ。」

「はい……」

叔父さんの言葉は少し厳しい様に感じるが、その言葉から心配してくれているのがわかる

「あ……そうだ一応、

冴夜の奴を呼んどいたからな、ちゃんと事情を説明しとけよ」

そう言つて仕事に戻る叔父さん……つて！兄さん呼んだの！？
……頭痛がしてきた。

そんな俺の様子を心配したのか陽介が心配そうに話し掛けてきた。

「な……なあ相棒、冴夜つて誰なんだ？」

「ああそう言えば陽介はあつた事がなかったな、冴夜は俺の兄さんなんだ」

俺の言葉に少し驚く陽介

「えっ！お前兄弟いたの？つて言うか兄貴が来るのに何でそんな落ち込んでんだ？」

「兄さんは普段は軽い性格に見えるけど、いい事はいい悪い事は悪

いってハッキリ区別する性格だから、今回の話しを聞いたら何て言われるか……」

そんな風に落ち込んでいると。

「あれ？君って確か……堂島さんの所の……」

誰かに話しかけられた。

よく見ると確か叔父さんと一緒に行動している刑事だ

「瀬多総司です」

「ああやっぱり、僕は足立透、よろしくね。所でさ君達、天城さんと同じ学校だよな？」

その言葉に俺と陽介は顔を見合わせる。

「え？天城さん何かあったんですか？」

昨日のマヨナカテレビの事もあるからか陽介が足立さんに聞き返す。

「え？いや……その実は」

足立さん話しでは、天城は急に姿が見えなくなったと家族から連絡がきた。

ただど事件とはまだ決まった訳では無いらしい似たような事件が続き署内が過敏になっているらしい。

また、一件目の殺人の前に被害者の山野アナが天城屋に泊まっていた、山野アナが雪子の母である女将さんに接客態度の事で酷い言葉を浴びせたらしく女将さんがストレスで倒れて、そして突然いなくなった雪子を疑っている者もいるらしい

「そう言う事だから、もしかしたら・・・」

足立さんがそこまで話しをした時だった。

「足立イ！コーヒー持ってくるのに、どんだけ掛かってんだ！」

叔父さんの怒号が廊下に響く。

「あ！すいません！って言うか今の言っただけ良かったのかな、ゴメン！自分で言っという何だけど今のなし忘れて」

そう言って足立は行ってしまった。

「なあ相棒、天城の奴さ」

疑われてるんじゃないか

「確かにこのままじゃ

見つけた!」え?」

声の先を見ると、署内の待合室に立っている里仲ちえがいた。

「やっと見付けたよ!二人とも!」

肩で呼吸している、千枝を見て此処までたどり着くのがどれだけ大変だったのかが良く解る。

「いや・・・その色々あってな・・・」

罰が悪そうに言う花村

「こんな事してる間にも
雪子は大変なんだよ!」

少し声を上げる千枝

「あ……その事で伝える事が」

現在、説明中……

「何それ……雪子が疑われてるの!」

「落ち付けって!気持ちは解るけどな」

千枝を宥めようとする陽介

「落ち着いてられないよ!すぐに助けに行こう!」

「助けにつて……あそこは危険なんだよ」

俺も何とか落ち着かせようとする。このまま行っただって危険なだけだ。

「相棒の言う通りだ。お前はあそこがどう言う所か知らないから、その事が言えるんだよ」

「そんなの、あんただって同じだったじゃん」

「うっ」

千枝の言葉に黙ってしまう陽介・・・確かに正論だし

「でもな・・・武器も取り上げられたしよ」

「え？武器？それなら売ってる場所知ってるからついて来てよ」

陽介の言葉に普通に返す
千枝

「どっしするっ」

陽介が俺に、意見を求めてくる。

「此処に居ても仕方ないしまずは行ってみよう」

俺の台詞に二人は頷く

「じゃあ案内するから行くっ」

千枝がそう言った時だった

「何処に行くって？」

総司視点 E N D

洸夜視点

俺はバイクを走らせるて
警察署についたが入り口
辺りで話しをしている集団を見付けた。
すぐに総司達だと気づいたが話しを聞くかぎり反省の色が見当たらないと感じた俺は少し反省させる事にした。

「じゃあ案内するから行くっ。」

「何処に行くって？」

俺の台詞に総司達三人がこちらを向く。

「・・・兄さん」

「・・・瀬多くんのお兄さん」

そんなあらかさまに、見付かったみたいなお顔をしても駄目だぞ総司。そして、千枝ちゃん覚えてくれてありがとう

「え！この人が兄さん！？顔がカッコ良すぎだろ・・・」

・・・俺って顔いいのか

「やあ、千枝ちゃんそして初めましてだね少年」

前に会ってるけどな

「少年って・・・ああ、俺花村陽介って言います。弟さんとはクラスで一緒に仲良くしてます。」

少し緊張しながら挨拶する花村。
礼儀はなっている方か・・・

「総司の兄の瀬多洗夜だ
よろしくな」

そう言うと視線を総司に向ける。

「さて総司、今日の件について聞きたいが此処じゃ
なんだから家に帰るぞ」

俺の台詞に総司、陽介、
千枝の三人が俺の方を向く

「ちょ！ちょっと待ってくれよ！じゃなく、待って下さい！その俺
達今から大事な用が・・・」

「そうそう！大分前から
約束していて！」

俺の台詞に何とか反論仕様と二人が話しかける。

「越してきて、一ヶ月も経って無いんだけどね・・・」

俺の台詞に二人はしまったと言った風だ

「何でもつとマシな事を言わないんだよ！」

「あんたこそ、ちゃんと

フオローしてよ！」

二人が揉めている内に、俺は総司と話しをする。

「総司・・・引越してはっかりで辛いと思うし、もうお前は高校生だ、だからこんな事は言いたくないが・・・あんまり問題を起すな一年だけだが、迷惑がかかるのは叔父さん達だそれは解るな」

俺の言葉に反応する総司

「わかってる。今回の件も反省してる・・・だけど！兄さん俺はやらなきゃいけない事が有るんだ！だから行かせてほしいんだ・・・」

コイツが此処まで言うとはな・・・覚悟は本物か

「やらなきゃいけない事ってなんだ？」

知ってるけどね

俺の言葉に下を向く総司

「ゴメンまだ言えない、けど・・・いつかきつと話すよ」

それが正解だ下手に喋っても信じられ無いだろう。

「あゝそれで私達！急いでるんです！早くしないと雪子が！」

「あ！馬鹿！里仲！」

そう言つて千枝ちゃんの口を隠そうとするが、ごめんね聞こえちやつた。

「雪子ちゃんがどうしたって？」

それも知ってるが下手に理解が早過ぎて怪しまれると大変だし

「え！それは雪子が・・・」

自分で言つといて罰が悪そうな感じになる。

はあこのぐらいにしてやるか万が一があると大変だし。

「分かつたよ、今回は見逃す。」

俺の言葉に三人は驚く

「え！いいの兄さん」

「誰でも、言えない事は
あるからな。ただし家族には心配かけるなよ、二人もだよ」

俺の言葉に二人の顔は明るくなる冷や汗かきまくっていたけど

「「ありがとうございます」」

そう行って二人は走って行く。その後に総司も続く

「ありがとうございます」

「いいから、早く行け急いでんだろ」

それに真っ直ぐにありがとうと言つな・・・照れる

そう行って走って行く三人の背中を見送る。

「・・・さて俺も行くか」

前回の花村の影の様な上級シャドウが出るかも知れんだから今回も見守ろうと思う。あの世界についてはまだ調べないといけない事があるからな。

そして、俺はテレビの世界に行くため家へと急ぐ。

洗夜視点 E N D

総司視点

「急げ！陽介！」

「分かってるって！」

「待ってクマ〜！」

あの後兄さんと別れた後

俺達は、千枝に教えられた場所で装備を整えジュネスのテレビからあっちの世界に向かいクマの力を借りて天城のいる城まで来た。此処まではよかった、だけど此処に天城がいる事が分かった途端に千枝は、俺達の説得を聞かずに走って行ってしまった。そして現在に至る

「くそ！邪魔くせえな！
ジライヤ！」

『ガル！』

風が吹いて途中で出て来るシャドウを蹴散らす花村。

「センセイ！後ろだクマ！」

「！？イザナギ！」

『スラツシユ！』

後ろから迫るシャドウを

ペルソナで迎撃するが消しても消してもシャドウが湧いて出て来る

「やばいぞ！相棒！早くしないと里仲が！」

「分かってるがキリがない」

陽介と背中合わせにして死角を補うが、どうなってるんだ倒しても倒しても湧いて出て来るなんて・・・

『センセイ！ユースケ！』

あいつだクマ！あいつがシャドウを呼び寄せてるんだクマよ！』

クマの指差す方を見ると

そこには王様をイメージさせる様なシャドウー！『ぼじてぶキング』がいた確かに良く見るとシャドウが減る度に『召喚』を使いシャドウー！『秘密のバンビーノ』を出していた。

「あいつかよ！あんのヒゲ野郎！ジライヤ！！」

『ソニックパンチ！』

ドガァン！

ジライヤの物理技がぼじてぶキングに直撃し消滅する

「ナイスだ！陽介、後は雑魚だけだ・・・オロバス！」

『アギー！』

先程、此処にくる途中で手に入れた馬の様なペルソナが出現し、炎をだしシャドウを焼き尽くす。

「陽介！クマ！先を急ぐぞ」

「おう！」

「センセイ！千枝ちゃんはその目の前の扉の先クマ！」

クマの言葉に従い、目の前の扉を勢いよく開ける俺達

「くく」里中！／千枝ちゃん」「」

突入した俺達の目の前に
写ったのは、部屋の真ん中で立ち尽くす、千枝がいたが・・・その
千枝の前にも千枝？がいた。

「あ・あれは！？」

「シャドウだクマ！抑圧された内面・・・不安定な精神状態がそれ
の制御を失ってシャドウが出たクマ！」クマの説明で俺達に気づい
た千枝が、こちらを向く

「み・・・皆・・・違う・・・違う！来ないで！見ないで！」

自分のシャドウが見られたくないのか手を広げてシャドウを隠そうとする千枝

『ふふ雪子はトモダチ・雪子が大事・・・手放せない・・・はははは！あんな都合のいいやつを手放せる訳ないよね！』

「違う・・・違う！」

『雪子ってさ美人だし女らしいから、男子にいつつもチヤホヤしてる・・・その雪子が時々あたしを卑屈な目で見てくる・・・それがたまんなく嬉しかったんだよね！！』

「黙れ！！」

「まづいぞ」

「よせ里中！」

不穏な空気をさした陽介が千枝に言葉をかける！

「あなたなんか！あなたなんか・・・私じゃない！」

その言葉が引き金となる

『うふふ・・・はははは！！！！そうよ私は私！あんた何かじゃないわ！』

そう言つと千枝？の回りに闇が集まり、覆面を被り手には鞭を持ちそして沢山積み重なっているシャドウ達の上に乗っているシャドウ
「――『千枝の影』が出現する。」

『我は影、真なる我、うふふ、あんたなんかより私の方がずっと上じゃない』

「あ・・・ああ・・・」

「まずい！クマ！千枝を頼むぞ！」

「任せるクマ！」恐怖などが重なり放心状態の千枝をクマに任せて俺と陽介はシャドウの前に出る

『なに？あんたたち邪魔よとつと消えなさい！』

「消えろと言われて消えられるかよ！行くぜ相棒！」

「陽介！油断するなよ！」

「ペルソナ！」

その唱えるとジライヤと

イザナギが出て来て二人はそれぞれ武器を構えて戦闘体勢に入る

「先手必勝だ！」

『ガル！』

陽介が先手を取り、風が
シャドウを襲う

『きゃああ！この！』

『ガル』をくらい思った

以上にダメージを喰らった様子を見て核心する

「どつやら相手の弱点は
風の様だな」

「ああ、なら俺の独壇場だ相棒！援護を頼む！」

そう言ってシャドウに向かって走り出す

「くらえ！」

『ガル！』

そう言って再び風がシャドウを襲うが……

『バーカ！同じ手がきくか』

『緑の壁！』

シャドウが唱えるとシャドウの前に緑の壁が出て来きて風が壁にぶつかり威力が激減する

『あーら、いいそよ風ね』

「嘘だろ！そんなのありかよ！」

陽介が余りの事に混乱するなかシャドウが視線を陽介に向ける

「！？・・・逃げる！陽介」

「攻撃がくるクマ！」

「え？」

『何、人事みたいに言ってるの？あんたたちもよ！』

『マジオ！』

ドオオオン！

「ぐわあああ！」

雷が降り注ぎ二人を襲う

「センセイ！ヨースケ！」

『これでとどめよ!』

『底知れぬ妬み!』

シャドウの攻撃が陽介に迫るが総司が前に出て陽介を庇う。

「ぐ!」

「相棒!」

余りの威力に膝をつく総司

「はあ・・・はあ、陽介どうにかならないか」

「どうにかって言ってもよ・・・あの壁をどうにかしねえと」

陽介がそう言った時だった

『疾風ガードキル!』

突然、何処からともなく

緑色の光が降り注ぎシャドウの壁を破壊する

『ちよっと！ナニよこれ！』

突然の事にシャドウが困惑する。

「どつしたんだ？」

「よく分かんないけど、今がチャンスだ！」

その言葉を合図に二人は駆け出し陽介が前に出る

「ジライヤ！」

『ガル！』

『ぐわあああ！』

風がシャドウを攻撃し、それに総司も続く

「イザナギ！」

『スラッシュ!』

総司がシャドウを切り付けそのあとにイザナギもシャドウを切る

『あああああ!』

それがとどめとなりシャドウは千枝?の姿に戻る

あの後、千枝と千枝?は
向かいあっていた。

陽介からは「俺もそうだった」などと言った応援して貰い。
総司も「それも含めて千枝だ」などと言って応援した

「私・・・最低だね・・・でもさこんな・・・わた・・・しでも雪子のこ
と・・・好きなのは・・・嘘じゃ・・・ないから・・・」

泣きながら答える千枝の言葉を聞いて千枝?は静に頷くと光りだし

仮面を付け

薙刀を持つペルソナ― 『トモエ』になる

「知ってるよ・・・皆もそう言う所あるから」

「・・・うん、ありがとう」

総司の言葉に少し気が楽になったのかお礼を言う千枝その時だった。

『うふふあははは！』

あらあ？サプライズゲスト？どんな風に絡んでくれるの？』

雪子？が前にいて俺達を見ながら喋っていた

「違う・・・あなたは雪子じゃない！本物の雪子は何処！」

『何？言ってるんの雪子は私私は雪子』

千枝と雪子？が言い争っている間にクマに聞いてみる

「やっぱり彼女は・・・」「そうクマね・・・“もう一人のあの子

“クマ”

やっぱり彼女のシャドウか

『それじゃ再突撃いって来まーす！王子様！首を洗ってまっけてヨ
！』

そう言っつて奥の方に向かっていく。

「ま！・・・まて」

雪子？を止めようとする

千枝だが膝をついてしまう

「今日は一回戻った方がいいな」

「ああ里中を休ませないとな」

「ちょ！ちよつと勝手に

決めないでよ！私は大丈夫だから！」

俺と陽介の話しに反論して叫ぶ千枝

「あんなー」

千枝の説得は陽介とクマに任せて俺はある事を考えていた。

「……あの時、シャドウの壁を破壊した力は一体？俺達以外の誰かがこの

世界にいるのか……」

そう考えていた時だった

「おーい！相棒！里中の

説得に成功したから今日は戻るっぜ！」

陽介から声をかけられて
考えをやめ皆の所に向かう

「今、行くよ（今、考えても仕方ない……今は体を休めて雪子を助けだす事を考えよう）」

そう言っただ俺達はこの城を後にした。

総司視点 END

洗夜視点

「ありがとなムラサキシキブ・・・全くあいつらは此処までくる間に疲労した身体で上級シャドウに挑んで死にかけやがって」

ムラサキシキブを消して俺は城を出ていく、総司達を隠れながら見ていた。

「属性耐性などを持つシャドウとは遅かれ早かれぶつかるとは思っていたが・・・あれは流石にぶざま過ぎるだろ」

全く俺があの時『疾風ガードキル』を唱えなかったら死んでたぞ。だが、流石にばれる所だったな総司はたまに鋭い所があるから。そう思っていた時

「・・・全く面倒事が続くな」

そう言って後ろを向くと

大量のシャドウが俺をとり囲んでた。

そして真ん中にシャドウに守られる様に一人の女性がいた。

『あら？皆帰ったと思ったのにまだ此処に王子様がいたわ!』

そう言いながら雪子？が立っていた。

「やあ、雪子ちゃん・・・やっぱり君は和服以外も似合うね」

『うふふ、嬉しいわ貴方が私の事を此処から連れ出してくれるのかしらっ。』

「すまないね、君を連れ出す王子様達は俺じゃないんだよ」

そう此処で、俺にとって彼女を助ける事は容易だが少なくとも総司には成長して貰わないと困るからなだが花村もそうだが千枝ちゃんも覚醒するとは、このまま行けば、雪子ちゃんも多分ペルソナに覚醒するだろう。

『あらそれは残念・・・だったら・・・消えて』

その言葉を合図にシャドウ達が襲いかかる。

「今日はお前のデビュー戦だ！・・・アリス！」

俺の台詞共に、金色の髪に青いドレスを着た少女の姿をしたペルソナがあらわれる。

「（この子はこの間、商店街で見付けたベルベットルームの扉のなかでイゴールの下で誕生させたペルソナだ）」

周りのシャドウ達は警戒しているのか少し距離をとる

その行動は普通では正解だが・・・コイツに限っては不正解だ！

「行け！アリス」

『死んでくれる？』

アリスがそう唱えると大群だったシャドウは一匹を残して闇に消える

「・・・あいつは別格か」

俺の目の前には脚がない宙に浮かんでいる黒い馬に乗っている槍を持った黒いシャドウー 『征服の騎士』がいた。

俺はアリスを戻しオシリスに変えて刀を構える

『串刺し!』

シャドウが先に動き槍を俺に向けて突っ込む。
だがその攻撃をオシリスが防ぐ

「物理無効を持つオシリスには効かないぞ・・・」

そう言うと刀で槍を受け流し、そのまま馬型シャドウの首を斬る。

『……!』

首を斬られた事によりシャドウはバランスを崩す。

「チエックメイトだ!」

『ジオダイン!』

ドガアアアアーン!!
バリバリバリバリ

オシリスが大剣を翳すと
巨大な雷がシャドウに直撃してシャドウはそのまま
消滅する。

「・・・」

シャドウを殲滅し終わると俺は辺りを見回すが雪子？の姿はなかつ
た

「逃げたか・・・（今日のところは戻るか・・・総司が家に帰る前
に戻らないと厄介な事になるかもしれないしな）」

そう言つて俺も城を後にした。

洸夜視点

END

鳥かこの紅い鳥（前書き）

大学が忙しく更新が遅れました。

鳥かこの紅い鳥

総司視点

千枝の影との戦いから翌日俺達は今、雪子がいる城の最上階にいた

「この先にあの子とその
シャドウがいるクマ」

クマの言葉を聞いて皆の顔付きが変わる。

「この先に雪子が・・・」

「ああ・・・俺達で天城を助けようぜ！」

「皆、油断するなよ」

此処にくるまでの間、極力戦闘は避けて来たから体力精神力ともに
余裕がある。

「ところでよ・・・此処まで来て難だけどさ」

ついさっきまで、気合いを入れていた陽介が何気なく口を開く。

「……」

俺も陽介の言いたい事が分かるからあえて黙る。

「ん？何かあんの？」

陽介の言いたい事が分からない千枝が早くしてよ、と言わんばかりに陽介に聞き返す。

「何かあんの？じゃねえよ！！天城を助ける為とは言え今日は俺達、学校サボってんだぞ！」

そうなのだ俺達は、今朝

千枝から『今日は学校サボって雪子を救出するからジュネスで待ってる！』と言うメールが届き俺と陽介は周りにバレない様にテレビの中に来たのだ。

「いいじゃん！別に雪子の命が掛かってんだよ！」

「言いたい事は、分かるけど！俺らの担任ってあのモロキンだぞ！よく考えてみる男子二人と女子二人が学校を休んだぞ！あのモロキンの事だ変に勘繰って最悪・・・自分の家に連絡されてるぞ」

その言葉に千枝は顔色が変わり、モロキンを知らないクマは話しについて行けず混乱している。

「（って言うか・・・家に連絡されるのは、かなりまずい昨日の補導の一件は見逃して貰ったけど昨日の今日で学校をサボった連絡が来たら多分・・・修羅と化した兄さんが黙ってない気がする）」

そんな事を考えていた俺は戦いの前なのに気分が悪くなる。

「もう！此処まで来たんだからいいじゃん！モロキン何か忘れて雪子の所にいくよ！」

そう言って扉に向かう千枝

「くそ！こうなりや！自棄だ！」

「クマには何の事が分からないクマよ」そう言いながら千枝に続く二人

「（・・・勝つても負けても俺には救いがない気がする）」

修羅と化した兄さんを想像しながら俺達は扉の先に進んだ

総司視点 E N D

一方その頃・・・

冴夜視点

「はい・・・はい・・・帰ったらちゃんと言い聞かせますので・・・

」

俺は現在は家で電話をしている相手は総司達の担任の諸岡という先生だ。

『まったく！頼みますよ！転校してそうそう、学校をサボるなど！男女四人で何をしているのか、まったく！けしからん！！一体どういう教育をしているのか知りたいですな！！』

頭に血が上っているのか、電話の先で怒鳴り散らす諸岡

「すみません・・・この野郎・・・好き勝手言いやがって、だが言い返せない

あいつら絶対に許さんぞ」

「まったく！頼みますよ！」

ガチャ

ぷーぷーぷー

俺がそんな事を思っている中、諸岡が電話を切り俺の耳に虚しく電話の切れる音が聞こえるだけだった。

「あ・い・つ・らあああ！！！！」

昨日の補導の件があったから少しはおとなしく成るかと思えば・・・誰かの命を学校をサボる理由にしゃがってどうやら少し仕置きが必要だな・・・

そして俺は刀と召喚器を持ってテレビの中に入る

洸夜視点 E N D

総司視点

『老舗旅館？女将修行！？そんなウザい束縛まっぴらなのよ！』

「や・・・やめて・・・」

現在、俺達は雪子と雪子？を見付け雪子？と対峙していた。

「雪子・・・」

友の苦しみが分からなかったからか、雪子？の言葉を聞いて表情が暗くなる千枝そんな中、雪子？は話しを続ける。

『生き方・・・死ぬまで

何から何まで全て決められてる！あーやだ！嫌だ！

伝統？誇り？そんなのクソ食らえよ！それがホンネ

よね・・・もう一人の私』

「ち・・・違う・・・違うッ！あなたなんか・・・」

雪子？の言葉を聞いて雪子はそれを否定しようとする

「！・・・まずいぞー！」

「ダメ！雪子ッ！」

「言つな！」

不穏な空気を感じ俺達は

雪子を止めようとして声を上げるが

「あなたなんか！私じゃないッ！」

その言葉が引き金になる

『ふふふ・・・あはははははははははは！！そうよ！私は私あなたじゃないわ！』

雪子？がそう叫ぶと闇が集まり上から鎖に繋がれた鳥かごが降ってきて中から

顔が人面の紅き鳥のシャドウー！『雪子の影』がでる

『我は影、真なる我・・・ふふふ力が・・・力がみなぎってくる』

「あ・・・ああ・・・何？何なの・・・」

「雪子！クマ君！雪子をお願い！」

「任せるクマ！」

雪子の事をクマに任せて
俺達は前にでる

『なに？何なの！あんた達邪魔よ！来て王子様！』

シャドウがそう叫ぶと冠を被り赤い服を着て剣を持つシャドウー
ー『白馬の王子』が出現する

「いきなり召喚か・・・」

「大丈夫、数ならこっちの方が勝ってる」

「皆・・・いくぞー！」

「」「ペルソナ！」「」

そして俺達とシャドウの闘いが始まった

総司視点 E N D

洸夜視点

「ん？ロストのこの騒ぎ様は・・・やはりシャドウが出たか！だが花村や千枝ちゃん達のシャドウとは比べモノにならないぞ！・・・少し急ぐか」

そう言って俺は、城の中を駆ける

「間に合えよッ！」

洸夜視点 E N D

総司視点

「はぁ・・・はぁ・・・」

「ゲホッ！ゲホッ！」

「里中！お前は一回下がれ」

『ふふふ、どうしたの？』

『そんなモノ？』

現在の俺達の状況ははっきり言って結構ツライところだ。

「流石にマズイ！あの王子野郎・・・真の抜けた顔をしてるけど強いぞ！」

そう雪子のシャドウの所まで行こうとするとあのシャドウが妨害をして、その隙に雪子のシャドウが攻撃を繰り返して現在に至る。

「負けれない・・・負けれないのよ！雪子を絶対助けるんだから！」

「千枝・・・」

千枝の言葉にクマの側にいた雪子が呟く

「喰らえ！トモエ！」

『ブフ!』

トモエの放つ氷が、シャドウを襲うが

『ふふふ・・・王子様には傷を付けさせないわ』

『白の壁!』

シャドウの前に白い壁が
出現しトモエの放つブフを防ぐ。

「そんな!」

「くツ!千枝の影の時と
一緒だ!」

どうする?何か手がないか弱点が無くなった、今どうすれば・・・弱
点?そうだ!

「千枝!俺にタルカジャを頼む!」

「え？なんで？」

「いいから！」

「もう！分かったよトモエ！」

『タルカジャ』

千枝にタルカジャをかけてもらい俺の力が上がる

「いくぞ！イザナギ！」

俺はイザナギをだしシャドウ達に向かって走り出す

『あははは！まだ来るの？そろそろ死んでくれる！』

シャドウがそう言うと俺の前に『白馬の王子』が立ち塞がる・・・
がこれが狙いだ！

『スラッシュ！』

『白馬の王子』が前に来た瞬間にイザナギで全力でたたっ斬って『白馬の王子』はそのまま両断される

「（弱点に執着していたから気付かなかったが弱点じゃなくても相手には効くんだ！）」

「！！・・・そうか！！」

陽介と千枝も俺の意図に気付きシャドウに向かって走り出す。

そして『白馬の王子』が

消えた事により『雪子の影』から冷静さがなくなるなる

『そんな！王子様！王子様っ！！』

『召喚！召喚！！』

何度も召喚を使うが『白馬の王子』はもう出現しない

「あのシャドウはもう出ないようだな・・・」

「今がチャンス」

「一気に畳み掛ける！！」

『ふざけるな！ふざけるなあああ！！！！』

『焼き払い！！』

『雪子の影』は辺り構わずに炎を放つ

「させないよ！トモエ！」

『ブフ！！』

氷が放たれ炎と相殺され
道が出来る

「今度は俺だ！行け！ジライヤ！！」

『ソニックパンチ！！』

『ぐわあ！！』

ジライヤから放たれる物理技がシャドウに直撃する

『まだ！まだ私は！！！！』

アサルトダイブ！』

そう言うとシャドウは俺に向かって突っ込んでくる

「「相棒！／瀬多君！」」

「・・・」

俺はシャドウから目を離さずに見ていた。

不思議な事に恐怖はなかった・・・それにシャドウが突っ込んでくる間はスローモーションの様に見えた俺は剣を構えるとイザナギも同じ様に構える。

そして一瞬だけ時間が止まった様に感じた瞬間に俺は剣を抜いた、そしてイザナギが同時に剣を振りシャドウを斬る。

『あああああ！！！』

そう叫びながらシャドウは落ち鳥かごが崩壊する。

総司視点 E N D

洗夜視点

「……………」

俺は言葉を失っていた・・・総司が突っ込んでくる
シャドウに剣を抜いた瞬間一瞬だけ『あいつ』の姿が重なって見え
た。

「総司この短期間でここまでペルソナを使いこなしていたのか・・・」

「

まるで『あいつ』みたい

じゃないか・・・

そう思いながら俺は総司達を影から見ていた。

洗夜視点 E N D

総司視点

倒れたシャドウはまだ消えていなかった

『…………誰でも良かった・・・私を連れ出してくれるなら良かった・・・
何処でもいい・・・何処か・・・
ここじゃない何処に・・・』

シャドウはそう眩いているが動く気配がなく、そしてそれを見て千枝が前にでてシャドウを睨むと

「これでおわりよ!」

そう言って留めを刺そうとした時だった。

「やめて!」

「・・・雪子?」

「天城さん?」

雪子が留めを刺すのを止めて自分が前にでる。

「ちょッ!雪子!」

慌てて止めようとする千枝に雪子は

「大丈夫だよ・・・後は

私が・・・」

そう言う雪子の顔は笑顔
だった。

「逃げたい・・・誰かに
救ってもらいたい・・・
旅館の後継ぎなんてクソ食らえ！」

「ゆ・・・雪子？」

「天城・・・さん？」

普段の雪子からはありえない言葉が出て来て皆も驚くなか、雪子は
話しを続ける

「そうね・・・確かにそれも私の気持ち・・・あなた私だね・・・
私ばかり
辛い目に可哀相な私・・・」

「・・・」

雪子の話しを皆が黙って聞く。

「けどね

父さんも

母さんも

おじいちゃんも

おばあちゃんも

旅館の人達みんな

仲居さんたちも

板前さんたちも

お得意のお客さん達も

稲羽の町の近所みんな

知ってる？小さい頃から

だよ？」

家族みたいで・・・

みんな優しくしてくれて

たん

雪子は話しをしてる最中でも自分のシャドウから目を離さない

「だからそういう中で育ってきたから今の私があるんだよ・・・旅館なんて潰れればいいって思ったりもするけどやっぱり私の家私のいられる場所・・・潰すなんてやっぱりできないよ」

「もちろん、あなたも」

「「「・・・あ」「」」

シャドウにそう言う雪子を見て俺達はいい声が出てしまった。

自分から出たシャドウ・・・それを否定した結果それを倒して終わる

が彼女は・・・

「前は今まで千枝が手を差し延べてくれたけど・・・今度は私が連れて行ってあげる」

そう言った瞬間に光が溢れてシャドウが花びらを撒き散らせながら頭に華の飾りをつけ周りには華の様な衣を纏うペルソナー……
「『コノハナサクヤ』になる。

「一緒に行こう？今度は大丈夫だから」

そう言って雪子とコノハナサクヤは手を取り合い。
そして周りの花びらは二人を守る様にずっと舞っていた。

総司視点 E N D

修羅と書いて兄と読む（前書き）

遅くなりました

多分、今年最後の投稿ですちなみに少しスランプ気味です・・・
泣）

修羅と書いて兄と読む

洸夜視点

「・・・まさか、あんな風にシャドウを受け入れるとはな・・・」

総司達の様子を見守りながら俺は呟いた

「（・・・さて一足先に戻って説教する準備でもするかあいつらがテレビに入ってる場所は検討がつく）」

そして俺はテレビから現在へと戻る

洸夜視点 E N D

総司視点

現在、俺達はクマからテレビを出してもらい俺達は
現実の世界に戻る所だ。

「・・・雪子、大丈夫？」

「大丈夫・・・少し・・・
疲れた、ただだから」

そう言う雪子は何処か顔色が悪い・・・やっぱりこの
世界は長くいると負担がかかるようだ。

「そんじゃあ帰るか」

「センセイ達！また来て
クマ！」

そして俺達はクマに手を振りながら現実へと戻る

「戻ったね」

「ああ、今回は流石にやばかったしな・・・」

そう言いながら、周りにはばれない様にテレビからでる俺達

確かに陽介の言う通りだ
今度からもっとペルソナを連れて上手く戦わないと・・・

「それじゃあ私はこれから雪子を家に連れてくから

「分かった、気をつけね」

「ああ、お大事に」

「皆、今回は本当にありがとう」

俺達の言葉を聞いた雪子はお礼を言う

「ところで瀬多君と花村はこれからどうするの？」

雪子を支えながら、千枝が聞いてくる

「そろそろ昼だろ？今更

学校に戻ってもしょうがないから売店で飯食ってから考えようぜ」

「・・・そつだな」

陽介の言葉に頷く俺

「それじゃあ行くか！」

陽介がそう言った時だった

「何処に行くって？」

その言葉と同時に声の主の方を向く俺達。

・・・そこには冗談のカケラもない雰囲気を纏った兄さんがいた。

総司視点 E N D

洗夜視点

テレビから戻った俺は総司達が出てくるで在ろう場所へ向かっていった。

「（あの集団で目立たなく大型のテレビがあり・・・そして、叔父さんから聞いたあいつらがよくいる場所・・・ジュネスだ）」

ジュネスに着いた俺はテレビの置いてある家電製品のコーナーに向かった。

・・・案の定、周りに気をつけながらテレビから出てくる総司達
いた。

「（!?!?・・・あの馬鹿共あんな所から何やってんだ誰が見てるの
か分からないんだから、もっと警戒しろ!）」

そんな俺の思いなど知らずに総司達は会話をしているが反省の色が
見えないと感じた俺は少しキレた。

・・・何かデジヤヴ?

「それじゃあ行くか!」

「何処に行くって?」

俺の言葉に四人がこっちを向く

「・・・兄さん」

呟く総司に無言で近付き俺は・・・

パンツ！

顔を叩いた

「！？・・・え？ちょッ！」

「相棒！」

俺が総司を叩いた事に驚く

「何で叩かれたかわかるな」

「・・・うん」

頷く総司

「総司・・・お前は高校生だ、だからお前がする事に一々口を挟む気はない・・・が俺は言ったな叔父さん達には迷惑をかけるなどお前はやりたい事があると言ったが誰かに迷惑をかけそして、学校とか最低限の事ぐらいちゃんとやれ！！」

俺の怒鳴り声に花村達と周りのお客さんが俺の方を向くが無視する。

「けじめぐらいつける！
最低限の事も出来ないで何が！やらなきゃいけないだ！ふざけるな
！最低限の事もしないで、誰かに迷惑がかかるなら今やってる事を
とっとと辞めてしまえ！」

「！おい！さっきから黙って聞いて！てめえは！黙ってる！！」「ぐっ」
口出し、しようとした花村を一蹴する

「だいたい貴様らもだ！
人の命を学校をサボる理由に使ってんじゃねえ！！！」

こいつらを見てると苛々する・・・ペルソナという玩具を手に入れ
・・・そして自分達だけが特別だと思ひ誰かを理由に何をしても許さ
れると思つてやがる

「・・・ごめん兄さん」

謝る総司

「謝るのは俺だけにじゃねえ・・・ちゃんと叔父さんにも謝つとけ」

そう言いながら俺は花村と千枝に視線を向ける

「お前達もだ今から学校に行けば五時限目には間に合うたる。」

「……あの〜」

今まで黙っていた千枝が手を挙げる

「ん？何だ」

「その……雪子が調子が悪いから、私は雪子を送ってからで言いですか？」

恐る恐る俺に聞いてくる

千枝

「ああ……言われて見ればそうだな（頭に血が上っていて気づくのが遅れたな）」

確かに顔色が悪いな……まだ言い足りないが仕方がない。

「それじゃあ、俺は行くが……総司」

俺は総司の方を向くと総司はゆっくりと顔を向ける

「お前達は何をしているかは知らないがお前達がいつでも正しい訳じゃないからな・・・それだけは忘れるな」

そう言っつて俺は四人の元からさる

「（・・・少し言い過ぎたかな？・・・仕方ない今日の晩飯は麻婆豆腐にしてやるか）」

そんな事を思いながら、俺はバイクで豆腐屋に向かった。

洗夜視点 E N D

総司視点

俺は兄さんの背中を見ながら、言われた事を思い出していた。

「（・・・確かに兄さんの言う通りペルソナと言う力を手に入れて少し浮かれていて周りの事に気づかなかった）」

現に叔父さんには、此処に来てから迷惑しか掛けていない気がする

「・・・せ、瀬多君のお兄さんって軽い性格に見えてただけど、怒るとぜんぜん別人だね・・・」

そんなに恐かったのか千枝は苦笑いしながら少し震えていた。

「でも・・・お兄さんの言う通り、私の為に学校を休んでまで助けに来てくれたのは嬉しいけど・・・やっぱり最低限の事もしないで何かしても駄目だと思う」

雪子は少し兄さんの言っている事がわかっていているみたいだ。

そして俺も雪子の言葉を聞いて兄さんについて思い出していた。

「（・・・いつも両親の都合で転校を繰り返していた俺にとって兄さんは理解者であり憧れだった。兄さんが高校を決める時も引越しをするからその場所に近い所にしなさいと言われてたけど、兄さんは自分で行きたい場所に行くと言って家族と離れた『学園都市』に一人で向かった。それに引き換え俺は親の言いなりのまま転校を繰り返していたんだ。）」

兄さんは基本的に個人の意見を尊重するタイプだから両親みたいに兄さんは俺の友人関係や行動に一口を挟まなかったけど、何かあると俺を守ってくれて悪い事をするとき必ず叱ってくれた。

そんな事を思っていると

陽介が

「でもよ！何も知らないくせにあの言い方は無いだろう！俺達には力があるんだ警察は当てにならないし、俺達しかこの事件の犯人を捕まえられないんだよ！」

そう言う陽介に千枝が答える

「花村さあ・・・あんたの言い分も分かるけど今回はお兄さんの方が正しいよ

お兄さんの言う通り私達さ非現実的な世界やペルソナで周りが見えなくなつて誰かに迷惑かけてたし、今回は私の責任だよ・・・瀬多君・・・ごめんね・・・私が

雪子の為とか言つて学校をサボつたからお兄さんに」

「そう言うなら私にも責任はあるよ・・・皆ごめんね」

そう言つて兄さんに叩かれた頬を見て心配する二人

「大丈夫だよ、それに兄さんも心配してくれたからだし・・・何より悪いのはこの事件の犯人だ・・・だから雪子が謝る必要はないよ」

「そつだぜ！天城さんは

被害者だ謝る事なんてないだろう」

俺の台詞に陽介が場の空気を明るくしようとして少し明るく話す

「でも・・・ッ！」

千枝に支えられてた雪子が突然、倒れそうになる

「雪子!?!ごめん私達もう行くね」

そう言っつて雪子を支えながらこの場を去る千枝

「それじゃあ俺達も行くか」

「面倒だけど仕方ないか」

俺の台詞に面倒そうにいう陽介を見ながら俺は少し考えていた。

「(・・・兄さん、俺は

やっぱり今回の事から手を引けない・・・この事件の

犯人を許せないんだ・・・兄さんは本当の事を話したら応援してくれるかな)」

そう思いながら俺達もその場を後にした

その後、学校に行きモロキンから嫌味を言われたが

その日の夕食の兄さんが作った麻婆豆腐は上手かった菜々子と叔父
さんも驚いた様子だったし

「お兄ちゃん！料理とっても上手だね！」

笑顔の菜々子に

「ホントに上手いな・・・」

お前、料理なんか出来たんだな」

今だ信じられないと言った感じの叔父さん、そして

二人の台詞を聞きながら

笑顔の兄さん

・・・兄さんやっぱり俺は皆を守る為にこの事件を解決するよ・・・
兄さんに本当の事を伝えるのはもう少し先に成るけど、いつか
きつと伝えるさ・・・

総司視点 END

その日の夜

洗夜視点

「よっ！イゴール！マーガレット！」

俺はどうやら夢の世界で

イゴール達に呼ばれたようだ

「ベルベットルームにようこそ、お元気そうで成りよりです」

この間会ったる。

「事件の方はどうですか」

「ボチボチだが確実に前には進んでいる」

そう言つとイゴールは笑いながら答える

「ヒツヒツヒツならば結構です。これからも期待しておりますよ」

「ふっ、任せろ」

俺がそう答えるとマーガレットが話しかける

「ところで洗夜・・・貴方に聞きたい事があります」

・・・？なんだ

「なんだ？誕生日か？」

首を横に振るマーガレット

「いいえ・・・単刀直入に聞くわ貴方、好きな人がいるでしょ」

「はぁ！突然なんだ！」

流石に驚く中学生でもそんな事を聞かないぞ！

「質問に答えなさい、どうなのいるの？いないの？」

「うっ・・・それは」

俺は考えると何故か脳裏に美鶴が過ぎる・・・
いやいや！あいつは違うだろ？なぜ！疑問形なんだ！俺！！

「いや！あいつはただ、
その・・・だから」

そんな俺を見てマーガレットは笑いながら答える

「ふふふ、ごめんなさい

そんなに焦るとは思わなくてエリザベスの言った通りね……」

「エリザベス？あいつが

なんか言ったの……!？」

突然、視界が歪む

またか！

「では、そろそろさよならね」

そう言って終わりムードな感じにするマーガレット

「まてまて！エリザベスから何を聞いた！教えてろ！」

俺の言葉を無視してマーガレットはただ笑いながら
こう言った

「私から言えるのはただ

一つだけ・・・女性をいつまでも待たせちゃ駄目よ」

・・・意味がわからん

「意味がわかん・・・ねえ・・・」

そうやって俺は意識をなくした。

洗夜視点 E N D

マーガレット視点

洗夜の消えた場所を見ながら私はさっきの話について思っていた

「ふふふ（やっぱり若い子の恋を応援するのは楽しいわね）」

私はエリザベスから聞いた話しを思い出しながらただ笑っていた。

マーガレット視点 E N D

稲羽の変化（前書き）

皆さん明けましておめでとございます。

これからも応援をお願いします

あとアクセス数が3万を超え、更にお気に入り登録は50を超えまして皆さんのお陰ですありがとうございます！

稲羽の変化

洗夜視点

「ハロー！お婆さん豆腐の焼き二つと木綿を一つ」

「あらあら、いつもありがとうね洗夜さん」

現在、俺は豆腐屋に来ていた。そこでお店の店主であるお婆さんと話しをしている最中だ、此処の豆腐は市販の豆腐とは比べられ無いからよく来ている内に店のお婆さんとも顔見知りになったんだよ。

172

「此処の豆腐は旨いからね・・・ところでなんか嬉しそうだけど何かあったかい？」

何時もより明るく感じた俺は豆腐を取り出しているお婆さんに聞いてみる

「実はね・・・孫が近々この家に来てくれるんだよ」

お婆さんがくるのか・・・

「へえー、よかつたじゃないですか」

俺の台詞に少し困った感じで返すお婆さん

「・・・孫が来てくれるのは嬉しいんだけどね・・・あの娘、この頃元気がなくてね・・・実は家の孫はアイドルをやっているってね、確かテレビでは、りせちーとか言われてたね」

「りせちー・・・ってまさか！『久慈川りせ』！」

「そうそう、その娘が私の孫のりせだよ」

俺はお婆さんから豆腐を受け取り金を払いながら、驚いていた。

久慈川りせーこの日本で彼女の事を知らない人はいないとまで言われている人気アイドルだ。幼稚園児からお年寄りまで彼女のファンは多く、ドラマ・映画・CMまで数多くの仕事をしている。

「（そんなアイドルがこの田舎町に来るんだ・・・少しこの町が騒がしくなるな）」

俺は豆腐屋から出ながら、そんな事を思っていると俺が停めていた

バイクの周りに明らかにチンピラと言った感じの奴らがいた。

「ひひひ、お兄さんがこのバイクの持ち主？」

「俺達が使つてやるから痛い目にあつ前にカギ寄せよ」

・・・ハアゝ嘆かわしい

彼等もまたゆとり教育の成れの果てか、まあ俺も入ってるけど。

「少年達よ豆腐屋さんに迷惑がかかるから早く消えなさい。歩行者の邪魔にもなるよ」

「はあ！調子乗ってんのか！てめえ殺すぞ！」

「やっちまおうぜ個々原！」

俺の台詞に何故かキレて
近くにあった木の棒を持つチンピラ二人・・・って言うか名前ダサ
ッ！コアラみたいだな。

「うっじあぁー！」

そんな事を考えてるとチンピラの一人が殴り掛かってきたが動きが単純過ぎて俺はそれを避けるとそのままチンピラの溝に目掛けて蹴りを放つ。そして気づく

「がはああ！」

「あ！（手加減するつもりがついやってしまった）」

気づいても既に遅く、俺に蹴られたチンピラはゆっくりと俺達から離れて

「オエエエ」

そのまま嘔吐してしまった

「小原！」

もう一人のチンピラが蹴られた奴の名前を叫ぶっていうか、何だよ名前が個々原と小原って芸人かなにかか？・・・そう言っている間にもチンピラの一人が俺に蹴られた奴を背負いながら撤退していく。

「（謝罪ぐらい欲しかったが彼等の方が被害が大きかったから今日は見逃すか・・・だが次来たたら潰すか
だけど、反射的とは言え少しやり過ぎたな反省しないと）」

そんな事を考えながらバイクに跨がった時だった。

「すみません、そのバイクの方少しお話を聞かせて欲しいんですが……」

俺が振り向くとそこには頭に青い帽子を被っている少年？がいた。

「……なんだ？コイツは男？いや！俺の長年の勘が言っているこの子は……」

「？……何ですか」

俺が黙ってジッと少年？の顔を見ていたから、少年？は少し警戒している。

だが……確信が得られないんだよな……よし！こう言う時は入学式の日美鶴にやった様に……

「少し失礼……」

そう言って俺は少年？に近付き少年？の前に来て

「？」

何なのか解らず頭を傾げる少年？そして俺はそのまま

むぎゆ

「！！な・・・なな／／／」

俺は少年？を抱きしめて
確信を得る

「やっぱり！君は女の子だろ！」

「！？・・・な！ち、違う！違います！僕は男ですよ」
顔が真っ赤に成りながらも否定する少年？うん！この子は逸材だから可愛いな

「残念でした！この抱き心地と俺の勘が言っている
君は女の子だ！」

「／／／・・・違っつたら！違います！」

頑固だな・・・此処まで女である事を隠すとは訳ありか？だが・・・何か負けた気がするから何としても女である事を認めさせよう！そう言っただけは

むぎゅゅゅー！

「／／／！！！」

更に抱きしめる

「認めないと、もっと抱きしめるよ」

いや～これ美鶴の奴にやった時は危うく処刑されそうに成ったからな。

「～～～／／解りました！解りましたから！放して下さい」

そう言っただけは少年？を解放する。

説明中・・・

「成るほどね名探偵か・・・」

この少年？もとい少女の名は――白鐘直人とう名であり名探偵の一族であるが彼女はまだ若くそして女だとナメられる為男装をしていたらしい、そしてこの稲羽の怪奇殺人の調査を警察に依頼されてこの町に来て情報収集をしようとした所チンピラをシバいていた俺に目が付き俺に事件の事を聞こうとしたらしい。

「はい・・・ですがいきなり・・・抱き着かれるとは予想外でしたノノ」

さっきの事を思い出したのか少し赤くなる直人

うん！やっぱり彼女は逸材だね・・・総司の彼女にどうかな・・・

「ゴホンツ！それはともかくこの町で起きてる事件について話しを聞きたいんですが・・・」

やっと落ち着いたのか冷静になる直人

「・・・話しをしてもいいけどさ、こちらも質問したいんだけどいいかな？」

「質問ですか・・・僕に

答えられる事なら」

「ならば君に聞く、何故この事件を解決したい？」

この質問には意味がある

この町で起きている事件はシャドウやペルソナ等と言った非現実的な者達に関係している。故に変な正義感やプライドの為ならば手を引かせた方が彼女の為だ。下手に犯人に近付き過ぎて・・・最悪死ぬからな

「・・・さっき言った様に僕の家である白鐘家は探偵の家系で昔から警察に協力していたので、そう言う

世界では発言力が強いんですが・・・現在は科学捜査が発展しているので探偵の存在が不要になってきているんです。ですが今回の事件は科学では解明出来ない点があってそれで僕達・・・白鐘家に協力要請が会ったんです・・・だから今回の事件は白鐘家の探偵のすべてが掛かっているんです・・・何より此処で僕がミスをしてしまったらお祖父様達が気付き上げた信頼も何もかもが・・・無くすのが嫌なんです・・・はは変ですね初対面の貴方にここまで喋る気はなかったんですが・・・」

少し泣いているのか顔を下に向ける直人

そうか・・・これが彼女の戦う理由か、まだ若いのにどれだけ重い物を背負っているのか覚悟は本物だな・・・そう思っていると俺は無意識に手を直人の頭の上に置いていた。

「・・・え？」

突然、頭の上に手を置かれたからか顔を上げて俺を見る。それに俺は笑顔で返す

「お前の覚悟はよく分かった・・・本物の覚悟を持つ奴には俺は協力は惜しまないぞ」

総司と直人はいいとして、花村の奴はヒーロー気取りだから手は貸したくないし雪子ちゃんと千枝ちゃんは今状況を理解していないから上に同じ。クマは・・・解らないから保留だな

「／／僕にもお兄さんがいたら・・・こんな感じ何ですかね・・・」

照れているのか顔を背ける直人

「ははは！別に兄さんって言うてもいいぜ！」

総司と菜々子や『あいつ』等を含めると弟と妹は沢山いるからな。

「・・・えっ！じゃあ・・・その・・・お、お、お兄ちゃん・・・」

やっぱり無理です！」

ははは！流石に駄目か、そう言って手を差し出す。

「瀬多洸夜だ洸夜でいい
よろしくな」

そして直人は手を握る

「はい洸夜さん」

そして握手をする俺達

「ところで君は事件を何処まで知っているんだ？」

それによつては話す情報が変わる

「亡くなったのは山野真由美さんと発見者である小西早紀さん・・・
犯人は最初に不倫相手の生田目太郎氏そして妻の柁みずすと判断さ
れていたが二人にはアリバイがあり犯行は不可能・・・そして此処
からは僕が個人的に思っている事です少し前に山野アナが泊まっ
ていた天城旅館の一人娘・・・天城雪子さんが行方が解らなくなり家

族から警察に届け出がでてます。僕はこの一件も事件に関係していると判断しています」

・・・あのテレビの世界も知らずに天城事件も感ずくとは名探偵は伊達じゃないな・・・ただ一つ気になるな

「ただの一般人の俺にそこまで教えていいのかい」

「何となくですが貴方は信じられる人だと判断しましたので」

この短時間でここまで信用されるとはな・・・ならばその信用に答えないと

「直人くん（一応君付け）山野アナと小西さんが亡くなる前そして雪子ちゃんが行方不明になる前の番組表を調べてみな・・・君ならおのずとこの意味がわかる筈だよ」

「番組表・・・？」

少し考えている様だが調べればすぐにわかる筈だ。
そして最後にヒント

「あと最後に今回の事件は常識に捕われては絶対に真実までは辿り付けないよ・・・あと一応、俺の連絡先それじゃあ！バイバーイ」

「えっ！あの・・・」

俺の連絡先を渡して俺はバイクを走らせる

「（何の変哲もないただの田舎町の筈がこの数日でここまで騒がしくなるとはな・・・この事件まだまだ奥が深そうだ！）」

そのままバイクを加速させて家に帰った

洸夜視点 E N D

直人視点

現在、僕は昼間に町で出会った洸夜さんと言う方に聞いた情報を元に亡くなった方々や行方不明になる前の番組表を見てある事に気付く。

「・・・これも、これもだ亡くなった方も行方不明になった天城さんも事件になる前にメディアに取り上げられている！」

偶然なのか・・・いや偶然は何度も続かない！今後はメディアの情
報に注意しないと・・・

そう思いながら僕は洸夜さんの連絡先が書かれた紙ををみる

「ただの一般人が解る事じゃ無いですよ、それに最後に言った常識
に捕われては事件は解決出来ないと言ったあの言葉の意味・・・洸
夜さん貴方は一体・・・」

直人の言葉はこの部屋によって掻き消されるだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2842z/>

ペルソナ4～迷いの先に光あれ～

2012年1月1日01時49分発行